pokemon XY

natsuki

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カロス地方。

新たなポケモンと、新たな主人公の冒険が始まる。

※ｐｉｘｉｖ版では２～５話ごとにまとめており、ｐｉｘｉｖ版だけの書き下ろした話もあります。

※２０１５／１／１４　１８０００アクセスありがとうございます。

※２０１６／２／２７　２４０００アクセスありがとうございます。

※ｐｉｘｉｖ版１～７巻も公開しております。最終８巻は４月投稿予定です。

全２５話完結予定。尺の都合で最終８巻に書き下ろし要素多めに追加します。

目次

プロローグ ―― 1
第一話　ＶＳエリキテル ―― 12
第二話　ＶＳデルビル ―― 19
第三話　ＶＳヤンチャムⅠ ―― 25
第四話　ＶＳヤンチャムⅡ ―― 30
第五話　ＶＳフシギダネ ―― 39
第六話　ＶＳアメタマⅠ ―― 44
第七話　ＶＳアメタマⅡ ―― 49
第八話　ＶＳカモネギ　◇ ―― 56
第九話　ＶＳヤヤコマ　◇ ―― 59
第十話　ＶＳハリボーグ　◇ ―― 63
第十一話　ＶＳフラベベ ―― 66
第十二話　ＶＳヘイガニ ―― 76
第十三話　ＶＳカビゴンⅠ ―― 82
第十四話　ＶＳトリミアン ―― 88
第十五話　ＶＳカビゴンⅡ ―― 94
第十六話　ＶＳズバット ―― 100
第十七話　ＶＳサイホーン ―― 105
第十八話　ＶＳサーナイト ―― 111
第十九話　ＶＳイベルタルⅠ ―― 115
第二十話　ＶＳイベルタルⅡ ―― 121
第二十一話　ＶＳイベルタルⅢ ―― 125
第二十二話　ＶＳマフォクシー＆ブリガロン ―― 130
第二十三話　最終兵器起動（前編）

135
第二十四話　最終兵器起動（中編）
139
最終話　最終兵器起動（後編）　―
142

プロローグ

美しい、青々とした空。
緑に生い茂った森の恵み。
その両方にあふれた、カロス地方という場所がある。
その南にあるのは――アサメタウンだ。街の中心には大きなアーチがあり、それが象徴となっている。
「引っ越してまだ二週間なのに……もうあの子友達が居るっていうのよ」
女性は電話でそう言うと、目の前を少年が駆けていった。
慌てて、女性は電話口を抑えると、少年に声をかける。
「あっ、イクス。どこへ行くのー！」
イクスと呼ばれた少年は振り返り、答える。
「ちょっと友達と待ち合わせー！」
そう言ってイクスは家を飛び出した。
イクスという少年は、この二週間前にカロス地方・アサメタウンに引っ越してきたばかりだ。そして、今彼は直ぐに出来てしまった友達のもとへと向かっていた。

家を出ると、同じタイミングで一人の少女もとなりから出てきた。
「おはよう、イグレック」
「おはよう、イクス」
そう言って、二人は帽子を取り、お辞儀する。イグレックの足元には、クルマユがいた。なんでも、昔ある女性とポケモン交換してもらったものらしい。
「クルマユも『おはよう』って」
そう言うと、クルマユは少しだけ口を綻ばせた。
「おはよう、クルマユ」
そういつもの動作を済ませて、彼らは歩き出す。
「そういえば、ティエルノはどうして僕たちを呼び寄せたんだろう？」
ティエルノは彼の友達のひとりである。巨漢だが、ダンスが得意であり、いずれポケモンでダンスチームを組みたいと思っているほどのダンス好きだった。
「なんでも、ビッグニュースですって。なんでしょうね？」
「……まあ、聞けば解る話か」
そんなことを呟いて、イクスたちはアサメタウンの中心にあるカフェへと向かった。

カフェテリアには、既に三人の少年少女が座っていた。

巨漢の黒のTシャツを着た少年がティエルノ。
ピンクのTシャツと肩からカバンを提げている少女がサナ。
緑のリュックを背負った茶髪の少年がトロバ。
それぞれ三人が腰掛けていた。
「おーい、こっちこっち！」
サナが声をかけると、イクスはそちらに向かい、腰掛けた。イグレックもそれに従った。
「あれ？　まだ待ち合わせ時間前だよね？」
「そーだけど、待ちきれないじゃない！」
そう言って、テーブルから身を乗り出したのはサナだった。
「さ、サナ、落ち着いて……。それで、ビッグニュースってのは？」
「そうですよ、ティエルノ。教えてあげなくちゃ」
「おう、そうだったな」
トロバに促され、ティエルノはあるものを取り出した。
それは小さなカバンだった。カバンを開けると中にいたのは――、
「ぽ、ポケモンだ……！」
モンスターボールが六つあった。

それも、三種類ずつ別々にわけられていた。
中には三匹のポケモンが入っていた。
「そう。ポケモンだよ。そして、これも」
さらにティエルノは自らが提げているカバンからあるものを取り出した。
それは長方形のスマートデバイスだった。それが五つ。ちょうどここにいる人間の分だけ用意されていた。
「これは……？」
「これはポケモン図鑑っていうんだ。誰だっけ、あの博士の名前……えーと」
「プラターヌ？」
「そうそう、今はミアレシティにある第二研究所で研究しているらしくって、これが昨日送られてきたんだよ」
ティエルノが言うと、イクスは感極まって、言った。
「早くポケモンを決めようぜ！　どれがいいかなー！」
「イクス、ちょっと待って。そういうのもいいけど、先ずはそれぞれのポケモンについて教えてあげなくちゃ。……さすがに、タイプくらいは解るよね？」
「馬鹿にしちゃいけませんねーティエルノくん」
そう言って、イクスは指を振る。

「ほうほう。ならば……フェアリータイプは何に強いの？」
「うぐっ。いきなり、最近発見されたばかりのタイプと来たか……！　ええと、ドラゴンタイプに無効ってのは覚えているんだけどなあ……」
「正解は、攻撃するのがフェアリータイプならば、格闘とドラゴンに強く、攻撃を受けるのがフェアリータイプならば格闘、悪、虫タイプに強いです。ドラゴンはその中でも『まったくダメージを受けない』わけだから……一番はドラゴン、ってことになるのかなあ」
　トロバは言った。イクスは頭を掻き毟ると、
「まだまだ勉強が足りないなー。……まっ、それはともかくどんなポケモンが入っているんだ？　開けてみてみようぜ！」
　イクスがそう言うと、六つのモンスターボールを凡て開け放った。
　凄まじい光の中から出てきたのは――六匹のポケモンだった。
　頭と背中を硬い殻で覆われていて、頭の刺が鋭いポケモンがハリマロン。ニコニコ笑って、こちらに向かって手を振っていた。
　小さい狐のようなポケモンがフォッコ。赤い目でじっとこちらを見つめているが、ハリマロンみたいに自分をアピールすることもない。クールな性格なのだろうか。しかし、時折ハリマロンの方を見て犬歯を剥き出しにしている。

胸と背中から白い泡が出ている水色のポケモンはケロマツ。ボールから出てからずっとぼうっとどこか一点を見つめている。

ハリマロンのペアは既にハイタッチして仲良くなっているが、フォッコのペアはツンとお互いを意識しているものの、向かい合うことはない。ケロマツに至っては相手を意識しているか（そもそもそこにいると理解しているか）すら怪しかった。

「なんというか……普通のポケモンが居ないよね……。どれも極端な性格ばかりというか……」

イグレックのファーストインプレッションが、まさにそうだった。

イクスはそんなことを気にもせずに、ポケモンを選び始めていた。

「どれにしようかなあ……。ハリマロンも捨てがたい、しかしフォッコもいい」

「ケロマツは？」

「なんかどんくさそうだからなあ。少なくとも、俺は選ばねえ」

……ケロマツはどうやら、イクスのお気に召さなかったらしい。

「……よし、選んだっ！」

三人がちょうど選び終えたのは、イクスとイグレックも選び終わったときと同じだった。

「あ、みんな一緒だね！　それじゃ、一斉に見せ合いっこしない？」

サナの一言で、全員ポケモンを見せ合うことにした。
「それじゃ、いっせーの……せっ！」
そして全員がポケモンを見せ合った。
イクスがハリマロン。
イグレックがフォッコ。
サナがフォッコ。
ティエルノがケロマツ。
そして、トロバがハリマロンという結果になった。
「なんだかんだでみんなそれっぽい……」
イグレックが言うと、みんな一斉に笑い出した。
「それじゃ、旅しようか……と行きたいんだけどさ。どうせみんなポケモンを持ったのは初めてのことじゃないか。だからさ……ポケモンバトルをしないか？」
「いいなそれ！」
ティエルノの提案にいち早くオーケーを出したのはイクスだった。
イクスは足をばたつかせる。今でもすぐバトルをしたいようだった。
「やっぱイクスはせっかちだねえ……。どうする？　なんなら、イグレックとやることにしようか。僕が審判をやるから。それで次はサナとトロバがやるっていうわけで、一

緒にやればいいじゃないか」
　ティエルノの言葉を聞いているのか知らないが、イクスは駆け出してすぐそばにある広場へと向かった。
　やれやれ、と呟きながらティエルノを先頭に、ゆっくりと追っかけていった。

◇◇◇

　広場にはもうイクスが待ち構えていた。この広場ではポケモンバトルも出来るように整備されており、白線がひかれている。イクスは道路の反対側に立っており、イグレックが道路側の場所へ立てば、もうバトルが始まる状態へとなっていた。
　それを見て、トロバとサナもバトルの準備を行う。
　完了したのを確認して、ティエルノが言った。
「それじゃ――バトル・スタート!!」
「フォッコ、『たいあたり』！」
「ハリマロン、『ひっかく』!!」
　ティエルノの言葉と同時に、イクスとイグレックはそれぞれのポケモンに命令を下した。

ハリマロンとフォッコはそれを聞いて、お互いに中心へと走っていく。
フォッコがまっすぐ向かうのを見て、イクスは、
「飛ぶんだ！」
そう叫ぶと、ハリマロンは空高くジャンプした。
フォッコはそんな突然の事態に対応できず、一瞬スピードを緩めるのを遅くしてしまう。
「いまだ、そこをねらえ!!」
フォッコが背中を向いている、その瞬間を――ハリマロンは忠実に狙って、ひっかく攻撃を与えた。

「あーん、負けちゃったあ」
あっという間に勝敗が決した。
また、サナも似たようなことを言っていたので、どうやらあっちはトロバが勝ったらしい。
「まあ、初めてのバトルだったからね」
そう言ってティエルノはバッグからスプレータイプのきずぐすりを取り出して、それ

をポケモンに吹き付けていった。
それが終わると、ティエルノは立ち上がる。
「とりあえず、明日七時に、またここで会おう！　そして、一緒に旅立つんだ。そうだなあ……ミアレシティにはポケモンダンスの有名なチームがいると聞くし、そこまでは行きたいかな」
「ミアレシティって大きなタワーがあるんでしょ？　そこ登ってみたいなあ……」
「ミアレシティだったらゴーゴートに乗れますよね。あれ一度乗ってみたかったんですよ」
各々がミアレシティのことを語って妄想に浸ってしまった。
旅立ちの日は――明日だ。

◇◇◇

その頃。
凡てを赤で身に包んだ女性がいた。
髪も、スーツも、サングラスも、靴も、みんな赤一色だ。
その女性が遠くからイクスたちを眺めていた。耳にはインカムをつけており、誰かと

会話しているようだった。

「……はい、彼らの手に渡った模様です。……はい、……はい。いかがなさいますか？」

相手からの言葉を聞いて、女性は小さく頷き、

「解りました。――では」

通信を切って、その場を後にした。

第一話　ＶＳエリキテル

次の日、イクスはいつもより早起きをした。
昨日からワクワクしていて寝付けなかったのだ。
そんな彼の性格を知っているイクスの母親は変わらずに彼を見送る。
「男の子だから旅をしたい年頃というのも解る。だけどね……、絶対に無茶はしないでね。怪我をしたら直ぐにポケモンセンターに行くのよ？　あ、あとカバンに幾つかきずくすりを入れておいたから、何か緊急のことがあったら使ってね」
「そんなに気にしなくても大丈夫だよ、ティエルノたちも居るんだし」
「そうなんだけど……」
「あ！　そろそろ、行かなくちゃ！　ティエルノと約束していたんだっけ。それじゃ、いってきます！」
そう言って彼は足早に家を後にした。
母親はただそれを、静かに見守るだけだった。

◇◇◇

昨日ティエルノたちとポケモンを決めたあのカフェテリアには、既にイクス以外のみんなが席に着いていた。時刻は午前六時五十五分、即ち彼ら全員が約束の時間よりも前に着いたことになる。ワクワクが止まらないのは、別に彼だけではない。

「遅かったな、待たせちゃったか？」

イクスが訊ねると、

「ううん、みんなさっき一緒に来たとこよ」

イグレックはそう答えて帽子を整える。

「そうだよ、イクス。……さぁ、行こうか」

そう言ってティエルノが立ち上がり、次いで他の三人も立ち上がった。ティエルノがゆっくりと歩いた先には、町の玄関にもなっているアーチがある。かつて、この地方にあった王国がこのアーチを作ったとも言われているが、その真偽は定かでない。

アーチを潜ると、イクスは明らかに空気が変わったように感じた。このアサメタウンは自然に溶け込んだ町で、森の香りを身近に感じられるからということなのだが、そのアーチを潜った瞬間、今まで混じっていた町の香り、人工物の香りが弱まり、森の香りが強まった。

アサメタウンの北には小さな森がある。彼らはただ『北の森』等と呼んでいるが、正

式には名前があるらしかった。しかし、育ってから知ったその名前は、もう『北の森』で充分に慣れ親しんだ後なので、彼らがその正式名を使うことはない。

彼らが北の森に入ると、サナが一歩前に出てみんなの先頭に立ち、振り返る。

「ねぇ、みんなのポケモンはこのモンスターボールの中じゃ窮屈だと思うの」そう言ってサナはフォッコの入ったモンスターボールを取り出す。「だから、この森が続く間だけ、ポケモンをモンスターボールから出してあげたいんだけど……どうかなぁ」

「それはいい提案だね」

ティエルノが頷く。

「そうだ、サナ。それだけじゃつまらないし……ちょっと遊びませんか。ポケモン図鑑をみんな持っているということもあるし」

トロバはそう言うとポケモン図鑑を起動させ、インデックスを見せる。ポケモンを見つけたり捕まえたりした状態ならばこの空白が埋まるのだが、今は最初に貰った三匹の部分以外は真っ白だ。

「……この北の森は野生ポケモンが非常に豊富。だけど、今まで僕らはポケモンを持っていなかったから自由に立ち入ることが出来なかった。……だから、ポケモンをいっぱい見つけるってのはどうかな？」

「面白そうだな！」

最初に反応を示したのはイクスだった。
次いで、他の三人も顔が綻ぶ。
そうして――『ポケモンかくれんぼ』対決が始まったのだった。
そういうわけで、彼らはそれぞれポケモンを探すための行動に移し始めた。サナは小さな草むらを、ティエルノはトロバとともにのそのそと森の奥へと歩いていった。
イクスも「俺が一番になる！」だとか言って何処かに消えてしまったので、今ここに居るのはフォッコとイグレックだけになる。
「……どうしよっか？」
イグレックが訊ねると、フォッコも首を傾げる。
「わっかんないなぁ……。第一、ポケモンを探すだとかなぁ……ほんと、みんなそういうの好きだよねぇ」
イグレックはそんなことを言っていたが、だからといって参加しないでああだこうだ言われるのも嫌だった。特に、イクスには。
そう考えると、イグレックも適当に捜索を開始した。別に難しいことではないのだ。さっさと三匹ほどポケモンを見つけてしまえばよい話なのだから。
そう勢いづけると、イグレックは森の中を駆けていった。

◇◇◇

それから二十分ほどが経過したが、イグレックは未だに一種類のポケモンも見つけられることは出来なかった。

「やばいなぁ……幾らなんでも零匹はまずいだろうし」

イグレックはそう呟いたが、悪路をずっと歩いていたからか、足がズキズキと痛み始めていた。今は寧ろポケモンよりも座れる場所を探していたのだった。

「椅子とか……都合よくあるわけないもんなぁ」

そんなことを言っていたが、そんな考えは直ぐに跳ね返されることとなる。

目の前に小さな切株が見えてきたからだ。それはイグレックの膝ほどの高さで、椅子として使うにもちょうどよい大きさだった。

運がよかった、とイグレックは呟くと切株に腰掛ける。彼女は改めて森を眺めてみることにした。

森には様々な種類の木の実が生い茂っていた。中には実がついているのもあり、フォッコはそれを取りに走るのだった。

「あんまり遠くに行かないでね！」

イグレックの指示通り、フォッコはイグレックの見える範囲にある木の実を取りに

いった。

赤い木の実だった。酸味が強く、煮詰めてジャムにすれば美味しくいただけるものである。

フォッコがしゃなりしゃなりと木の実の前に立ち、啄む。

するとフォッコは、目の前に一匹のポケモンが居るのに気が付いた。

黒い長い耳を持ったポケモンだった。黄色い身体は電気タイプのポケモンを想起させる。

そして、それは漸くイグレックにも目視することが出来た。

「あのポケモンは……！」

イグレックは何かを思い出し、ポケモン図鑑を取り出す。そして、そのポケモンに向けた。

ポケモン図鑑はそれがどんなポケモンなのか、直ぐに教えてくれた。

エリキテルというポケモンは、太陽光で発電するポケモンだ。そして、それを機械に用いたり、自分の生きるためのエネルギーにもすることが出来る。

ポケモン図鑑には、そんなことが書かれていた。

「ふうん……。でも、あんまり見たことないなぁ」

イグレックの言う通り、この森にはあまり生息していないポケモンのひとつである。

つまり、エリキテルと会えることが相当に珍しいのだ。
「これでみんなをぎゃふんと言わせられるなぁ……」
そう言うとイグレックは小さく微笑んだ。
その時だった。
「キャ――――――ッ!!」
女の子の叫び声が森に響き渡る。あれは、間違いなくサナの声だ――イグレックはそう確信すると、エリキテルに小さく手を振ってフォッコとともにその場を後にした。

第二話　VSデルビル

イグレックがその声の源に辿り着いたとき、既にイクスたちもその場に居た。先ずは目の前の情景から、どうなっているのかを確認する。
サナは少し小高い岩場に腰掛けている。しかし、身体は震えていた。
そしてサナを取り囲むように――五匹のデルビルの姿があった。
「デルビルは縄張り意識がとても強いんですよ」
トロバはイグレックに聞こえるように小さく呟く。つまりは、サナは解らぬままデルビルたちの縄張りに入ってしまった――そういうことになる。
「五匹に対してこっちは四匹……少し戦力不足かな？」
「いや、戦力はあるに越したことはないよ。……ケロマツ、『あわ』だ！」
ティエルノはそう言うと、ケロマツは口からシャボン玉のような泡を吐き出した。それはデルビルたちに向かうと、ぶつかった瞬間にそれは破裂した。
「五匹全員に当たっている……！」
「これが群れバトルのいい特徴だよねぇ」
「群れバトル？」

イグレックはその単語を聞いたことが無かった。
「群れバトルとは今の状況をさすんだよ。複数対一、または複数対複数……そのバリエーションしかないけど、戦法が無限大に広がるというのは、言わなくても見えてくるかなぁ？」
ティエルノの言葉に、イグレックはこくこくと頷く。
バトルに戻ると、技を食らったデルビルたちは、一斉に炎を吐き出した。それは、フィールド一面を焼きだした。
それの意味は。
「……これが群れバトルの厄介でもあり、長所でもあるポイントさ。自分の攻撃が敵ポケモン全体に当たるけれど、それは敵にも同等の条件……というわけさ」
イクスとトロバのハリマロンは、その炎によるダメージをもろに受けてしまった。
「くっ……だけど、まだ此方が勝っているのは確かだね」
「ハリマロン、『すなかけ』だ！」
トロバは直ぐに反撃を開始した。しかし、とても草タイプの技で炎タイプに挑もうなど思ってはいない。
先ずは、外堀を埋める必要がある――というわけだ。
砂が目に入ってしまったデルビルたちは、暫く技の命中精度が下がる。そして、それ

は彼らにとってチャンスだった。
「ケロマツ、もう一度『あわ』だ！」
「ハリマロン、『ひっかく』！」
「フォッコ、『たいあたり』！」
そして四匹の攻撃がデルビルたちに当たり――デルビルたちはその場に倒れた。

◇◇◇

「……しかし、大変だったね」
あのあと、デルビルたちは森の奥に消えていった。
しかし、デルビルはこの北の森にはあまり居ないポケモンなのだ。ここまで群れを成して出てくること自体が、珍しい。
「……まったく。どうなっているんだろうね」
ティエルノはぶつくさいうが、ほかの人にとってはよく解らないことだった。
「カロス地方の生態系が……変わっている、ということ？」
イクスが言うと、ティエルノはポケモン図鑑を手にとった。
「ポケモン図鑑を見てもらえれば解るんだけどさ、デルビルはこの地域にいるはずのな

いポケモンなんだよ。だから……ここに居るのがおかしいのさ。僕らがもつこのポケモン図鑑の説明がおかしい可能性も、確かに否めないけれどね」
「デルビル……きっと、私たちが間違って縄張りに入ってしまったから、あんなに怒ってしまったんだわ」
　イクスが言うと、ティエルノは首を横に振る。
「デルビルはこの辺には生息しないポケモンだよ。……彼らではなく、森に住む古来のポケモンの縄張りを、彼らが侵しているんだ。それは、僕らも例外ではないけどね」
　ティエルノがそう言って頭を掻くと、立ち上がった。
「よし、それじゃあ……先へ進もうか。急がないと、ハクダンシティに着く前に日が暮れてしまうよ」
「そうね」
「そうだな」
「そうだね！」
　ティエルノの言葉に、三人が頷いた。

◇◇◇

その頃。

とある研究施設。

「モミジー、まだ終わんないのー？」

緑色の髪をした、女性が青い髪の女性に問いかける。彼女たちは皆、似たような格好をしていた。共通点は――服装が凡て赤いことだ。緑の髪をした方は、ハーフパンツに七分丈のシャツ、そして肘までかかる手袋、膝丈のブーツを着用していた。対して、青い髪をした方は、スカートで、中にスパッツを履いている。そして手袋はつけておらず、代わりに長袖の服を着ていた。彼女たちはともに、ゴーグルを着用している。

モミジと呼ばれた女性が深い溜息をついて、椅子を回転し、訊ねた方へと向く。

「そんなこと言うけど、バラ、あんたはもう終わったの？」

「んー、五分五分」

「何がよ」

「終わる可能性と、終わらない可能性」

「で？　実際は？」

「まだ終わっていないのでした」

「バカ」

そう言うとモミジはバラの頭をごつん、とグーで叩く。

「グーはないでしょ！」
「巫山戯てる罰」
「えー」
　バラはそう言って、空いている回転椅子に座る。
「そういえばさ、部下から来たんだけど」
「何？」
「――『あれ』が、無事に渡ったらしいよ」
　バラの言葉に、モミジはぴくりと身体を震わせる。
「へえ……」
「どう？　ビッグニュースだと思わない？」
「一面記事レベルね」
「でしょー」
　バラは回転椅子をクルクルと回す。
　モミジは再び機械の開発へ勤しむ。
　そんな日常だったが、一部だけ非日常も紛れている。
　それが彼女たち――フレア団のとある研究者の日常だった。

第三話　VSヤンチャムI

ハクダンシティ。

街の中心には大きな噴水があり、それが街のシンボルにもなっている。自然と人間が調和されている街としても有名で、ミアレ新聞社が主催する『カロスタウン・シティカップ』では二年連続一位を獲得しているほどだ。

そんな街に、イクスたちはやってきた。

「ここがハクダンシティかー……。俺たちだけで来るのは、初めてだよな？」

「そうだねー。いつもはママやパパが一緒だったし。すっごい新鮮な気分！」

イクスの言葉に、サナが頷く。

この街、ハクダンシティ迄でも、彼らはここまで一人で（子供たちだけで、と言ったほうが正しい）来たことはない。

だから彼らは、こんな近いところですら、冒険をしたと実感しているのだ。

「……やっぱり、この街に来たんだからポケモンジムだよな！」

「そうだね。ポケモンジムならば、一番自分の力がどれくらいかを試すことができるし……いいかもしれない」

ティエルノがうんうん頷くと、トロバがあるものを見つける。
赤いカラーリングの二階建ての建物。
ポケモンセンター、だ。
「まあ、先ずはポケモンセンターに入ろうよ。そこでポケモンを回復したりしないと。まださっきのバトルでダメージが残っているんじゃないかな？」
「そうだね」
トロバの言葉を聞いて、彼らは一路ポケモンセンターへと向かうこととした。

ポケモンセンターへ向かうと、一人の女性がカフェカウンターにある席に腰掛けていた。どうやらこの街のポケモンセンターはカフェとくっついているらしい。コーヒー豆の焙煎されたいい香りがポケモンセンター内に漂っている。
「……あの人、何か見たことあるよーな……」
「そう？」
イクスの言葉に、イグレックもそちらを見てみるが――思い当たるフシもない。
そんなことをしていると、どうやらあちら側も見られていることに気がついたらしい、こちらを見てきた。
茶髪の女性だった。肩にはエリキテルを載せている。

「……あら？　どうかした？」
女性は訊ねるも、
「いやー、どっかで見たことがある気がしたんですが……どうやら人違いのようで」
対してイクスは飄々とした感じで答える。
「……そうだ。これも何かの縁よ。ちょっと、私の取材に協力してくれない？」
「……え？」
女性の言った言葉に、イクスたちは同時にそう言った。あまりにも予想外のことだったからだ。
「ああ。その前に、私の自己紹介をしておかなくちゃね。私の名前は、パンジー。ミアレ新聞社でジャーナリストをしているわ。実は今……この街にある問題が起きているのよ」
パンジーが言う取材とは、つまりこういうことだった。
この街には今、悪戯者のポケモンがいるらしい。しかも、皆がそのポケモンの姿を見ていないというのだから、タチが悪い。
手法は様々で、例えばちょっと目を離した隙に無くなってしまっていたりとか、監視していてもその目を塞がれてしまうなどがあるらしい。
「しっかし……そんなので見失うとか有り得るのか？」

　イクスが訊ねると、パンジーもため息をつく。
「そこが解らないのよねえ……。被害は甚大らしいのだけれど、まだ目星もついていない。警察だって必死に捜索しているのに、よ。これっておかしな話だとは思わない？」
「よっぽど早いスピードで奪っているんだろうなあ」
「やはり、そう考えるのが一般的よねえ……」
　そう言うと、またパンジーはため息をついた。
「実はね、私の妹からの依頼なのよ。ちょっと突き止めてくれないか、って」
「その妹さんがやる、という手はなかったんですか？」
　イグレックが訊ねる。
「確かに私もそう言ったのだけれど、彼女忙しいのよ。だから、しょうがないかな、って感じ」
「しょうがない……なら、しょうがないですけれど。どうして、それを私たちに話したんです？」
「捕まえるのを手伝って欲しいのよ。目星が全くついていないんだけど、この街はとても広いから、一人で探すのは大変なのよ？」
「ジャーナリストの仲間とか」
「私はフリーなの」

それを聞いて、ああこの人ぼっちなんだな、と誤解するイクス。
「……今変な誤解したわね？」
「いいえ、別に」
「まあ、いいわ。それで……お願いできないかしら？　勿論、見返りはするつもり」
「どれほど？」
「ジムリーダーに優先的に戦える権利を差し上げるわ。私、ジムリーダーと知り合いなの」
その言葉に、イクスは大きく頷いて、双方の意見が合致した。

第四話　ＶＳヤンチャムⅡ

◇ｐａｒｔ：１◇イクス・イグレック

「ともかく……パンジーさんの指示でここにいる訳だけれど」

イクスはそう言うと小さくため息をつく。ここはハクダンシティの中心部から少し離れたモダンな町並みが広がるストリートだ。そんなストリートに彼らがいるのは、パンジーがイクスたち五人を三グループに分けたから、というのがある。

イクスとイグレックはここにいる訳だが、それからどうすればいいのかは一切指示が出ていない。

「好きに回れとかそういうことなのかな……」

イグレックが言うと、イクスはたぶん、とだけ言って頷いた。

◇ｐａｒｔ：２◇トロバ・サナ

トロバとサナはイクスたちと逆の方向に立っていた。場所をいえば、ちょうどミアレシティへと向かう道路の出口付近である。

「でも、実際に私たちだけでポケモンを見つけられるのかな？」
「一人よりかは六人いた方が見つけやすいんだろ。僕も解らないけれど、困った人をほうっておくわけにはいかないじゃないか」
「そうだけど……」
「さ。一先ずあたりを見渡すことにしよう。……今のところ、変わった様子はないようだね」
「初めて来たのに、『変わった』なんて分かるの？」
「何となくだよ」
そう言って、トロバはシニカルに微笑んだ。

◇ｐａｒｔ…３◇ティエルノ・パンジー

ティエルノとパンジーはポケモンセンターの前に立っていた。
「……ほんとうに見つかるのかなあ」
ティエルノが呟くと、ゴーグルを付けていたパンジーが訊ねる。
「大丈夫よ。六人もいるんだから、どこかで一人が見つけてくれるはずよ。この街は、そう広くないから。これがもし、ミアレシティとかだったらまた話は変わっただろうけれど」

「そりゃ、ミアレシティとかで探すとなったら、僕たちだって骨が折れるよ。そんなこと、しようとも思わないなあ」
「私だってそんなことしたくないわよ……。おっと、あれは」
パンジーの言葉を聞いて、ティエルノもそちらを見る。
屋根の上に、一匹のポケモンが載っているのが見て取れた。
目付きの悪い、パンダのような生き物。一発でそれがポケモンだと解った。
「なんだろう、あのポケモン……？」
そう言うと、ティエルノはポケモン図鑑を取り出す。
ポケモン図鑑は、簡単に、そのポケモンの名前を導く。
「……『ヤンチャム』？　聞いたことないなあ……」
「ちょっと待って。それって、ポケモン図鑑？」
パンジーがそれを見て、とても驚いた表情を示した。ティエルノは取り敢えず小さく頷く。
「なんてこと……、まさかこんなところで『図鑑所有者』に出会えるだなんて！」
「図鑑所有者？」
「図鑑を持つ、人間のことよ。選ばれた存在として、有名なんだから」

◇ｐａｒｔ：１◇

図鑑所有者。

その響きはとても誇らしいものだ。

古くは『ポケモン研究始まりの地』であるカントーから始まり、そして今やポケモン図鑑というものを持つ人間こそが選ばれた人間――そんな勘違いを持った団体が生まれるほどに、図鑑所有者という存在は良くも悪くも成長した。

そして『図鑑を持つことこそがステータスだ！』と言わんばかりに図鑑を開発していく集団も居た。

しかし、ポケモン図鑑とは、本当に特殊な技術の結晶であり――知識をかじっただけの人間が作ったものは、ただの模倣に過ぎなかった。また、それが報道されていくと、益々ポケモン図鑑というものが神格化されていった。

ポケモン図鑑こそ持てば、強くなるのではないか？　かつてそんな研究をした科学者がいた。しかしそんなことは全くあり得なかった。

何故ならば、持つことで力を得るのではなく、『生まれながらにして』力を持っているのだから。

そんな存在を、博士が厳選していく。それはあまりにも気の遠い作業だ。

だから、図鑑所有者が見つかるのは幾年かに一回、それも多くて三人だった。

しかし、今回は違う。五人も居る。それを見たとき、あまりにも滑稽でイレギュラーだったため、失笑してしまった。

だが、見つかってしまったからには、その数の図鑑を用意せねばならない。何時もならばそこまで時間がかからないのだろうが、三年の歳月をかけて制作することとなった。それほど、ポケモン図鑑は希少性が高い。

「……と、ここまでが僕の知る『ポケモン図鑑』についての情報さ。他に質問は？」

そう言われてイクスとイグレックは言葉を失っていた。イクスがポケモン図鑑で今まで見つけたポケモンを、イグレックに見せていたのだが、途中で誰かが現れたのだ。

紫色の天然パーマに白衣を着た男だった。無精髭を生やしていて、少しだらしない。

「……あの、どうしてポケモン図鑑について、そこまで知っているんですか？」

そう。

彼女たちが特筆すべきポイントはそこだった。白衣の男がイグレックたちに話しかけてきたのも、そのポケモン図鑑を見せていたからだった。

「あぁ……言い忘れていたね、僕の名前は……」

がふっ!?　と驚いた声を出したのと、その男の顔にポケモンがくっついてきたのは、ちょうどそのときだった。

そして。

「ちょっと。大丈夫、そこの人！」
パンジーを先頭にして、サナたちが此方に向かって走ってきた。
「みんな、どうして!?」
イグレックが言ったその言葉――つまりは何故パンジーたちがここに居るのか――その為には、少しばかり時間を戻す必要がある。

◇◇◇

ティエルノたちが一番初めにヤンチャムを見つけたすぐ、ヤンチャムは路地裏へと駆けていった。
「あっ！」
パンジーは決して逃がすことなんてしない。ただ、追いかけて追いかけて、必ずや捕まえる――ただ、それだけのために。
だから、彼女もまた、ヤンチャムを追いかけるために走り出す。それを見て、ティエルノも非常にゆっくりとではあるが走り始める。
ヤンチャムを先頭にしてトレーナー二人が走る。それは他の町ならば、非常に微笑ましい光景だろう。

この町でもその光景は通用する。だから、皆助けるようなことはしない。何故なら、悪戯者が何者か……誰も解らないのだから。

「あーっ、このままじゃ埒があかない！」

パンジーはそう言って髪を掻き乱す。そして彼女はモンスターボールを構え、

「エリキテル、お願い！」

掛け声とともに、ボールを投げた。地に落ちたボールからはエリキテルが姿を現す。

「エリキテル、『でんじは』！」

パンジーはエリキテルの『でんじは』でヤンチャムの素早さを落とし、捕まえる作戦に出た。

しかし、エリキテルの放った『でんじは』はその想い虚しくヤンチャムに当たることはなかった。

当たらなかったのを見て、ヤンチャムは此方を向く。

そして、べーっと大きく舌を出した。

「待てええ!!」

パンジーはとうとう堪忍袋の緒が切れてしまったのか、今までよりも速く走った。

ティエルノとエリキテルを若干置いていく形だったが。

◇ｐａｒｔ：２◇

さて、その頃サナたちと言えば、

「ねぇトロバ、そのアイス一口ちょーだい！　たしか、ブリーの実だよね？　私のも一口あげるよ！」

「君のはモモンの実だっけ？　あれ甘過ぎてさぁ、僕の口に合わないというか……あれ、意外と美味いな」

優雅にもアイスクリームを購入し、町を歩いていた。適度な身長差に二人で別々のアイスクリームを購入し交換し合うその光景は、恋人同士かと思わせる。

しかし、少なくともサナはそんなことを意識しておらず、さも当然といった表情だった。

対して、トロバの方は表情には出していないものの心の中ではすごい恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。幼馴染みとはいえ、年齢を重ねていくうちにそういうことは恥ずかしくなっていくものだ。

「あ、トロバ！」

そんなときだった。サナが前方を指差して声を上げた。

そこに居たのは、ヤンチャムだった。右から左へ駆けている。そして、少し遅れて、ティエルノとパンジーが走っていた。

「もしかしてあれが……？」
そう言って二人は目を見合わせ、彼らに追いつくために駆け出した。

◇◇◇

「……というのが事の顛末でして」
パンジーはその言葉で説明を終了した。白衣の男は顔からポケモンをひっぺがし、抱えていた。
「ふーん、噂には聞いていたがこいつがハクダンシティの……」
男はそういうとヤンチャムの身体を嘗めるように見つめる。
「あの、」
気になって、パンジーは訊ねる。
「もしかして、あなたの名前は……」
「解ってしまいましたか。まぁ、この子供たちには全く気付かれなかったのですが」
そう言って男は漸くヤンチャムから視線を逸らした。
「君たちと会うのは初めてのことだろう。だから、改めて自己紹介をしよう。私の名前はプラターヌ、この地方でポケモンの研究をしているよ」

第五話　VSフシギダネ

ポケモンセンター内にある小洒落たカフェにイクスたちはやってきた。理由は単純明快だ。

「君たちがまさかこんなにも早くハクダンシティに来るなんて、思ってもみなかったよ！　いやぁ、まったく、日々驚かされる！」

そう言ってプラターヌはニヒルな笑みを浮かべる。その姿を見ると、やはり未だに彼がポケモン博士とは信じがたい。

しかし彼は列記としたポケモン博士なのだ。カロス地方のポケモンを、何年にも渡り研究している。

「しかし……どうしてここまで来たんですか？」

サナが訊ねると、プラターヌは持っていた鞄を机上に置いた。

「実は君たちに一つ、渡し損ねたものがあってね。それを渡しておかなくては……と、僕が自らここに来たまでだ」

そう言って、プラターヌは鞄を開ける。そこにあったのは――モンスターボールだった。

「これは……？」
「君たちにとって、大いに重要なものだよ」
　勿体ぶらすプラターヌだった。
　そして、彼がそんなことを言ったので、イクスは、モンスターボールを凡て開放する。プラターヌはそれを見て慌ててしまった。
「な、なんてことを……」
「すげー！」
「かわいいー！」
　男性陣、女性陣それぞれのファーストインプレッションがそれだった。そこに居たのは、彼らが見たことのないポケモンだった。
「遠いカントー地方に居るポケモンだ。それぞれ、ヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメ。皆、強いポケモンだ。……あぁ、そうだった。選ぶならば、初めに君たちが決めたポケモンと相性のいいポケモンにしたほうがいい。例えば、フォッコの苦手なタイプは水だから、草タイプのフシギダネならばその相性もどうにかなるだろ？」
　その言葉に、イクスたちは頷く。そして、彼らは選び始めた。
　彼らの心の中では、既に決まっていたらしかった。
「ほう……なるほどね」

それを見たプラターヌは思わずうんうんと頷いていた。
イクスとトロバはゼニガメ。
イグレックとサナがフシギダネ。
そしてティエルノがヒトカゲ――そういう結果になった。結局はプラターヌの指示をそのまましたがった形となる。
「いやぁ……しかし、渡し損ねて済まなかったね。私にもいろいろと事情があって……」
そう言ってプラターヌは照れ隠しに笑った。
「事情？」
「ま、まあ。その辺は特に今語るべきことでもないだろう。……君たちはポケモントレーナーとなったのだから。それくらいは自覚してほしい……そんなポイントがある」
そう言うと、プラターヌはイクスを指差し、言った。
「――君にとって、『ポケモン』とは何か？」
間髪を入れず、イクスは答える。
『仲間』だ。一緒に強くなって、笑い合って、仲良くなる……そんな存在だと、思う」
「なるほど」
それを聞いて、うんうんと頷く。
「では、君は？」

次は、サナを指差す。
「私は、『友達』。だって、ポケモンといると楽しいんだもん」
「ふむ。では」
次はイグレック。イグレックは帽子の位置を整えて、少し恥ずかしそうに言う。
「私も……『友達』、かな……。ポケモンといると、やっぱり面白いもの」
「ふむ。では、」
トロバは小さく頷いて、
「僕もイクスの意見と同じです。『仲間』。ともに強くなり、思い出を作り、生きていく……そういう存在だと思うのです」
「では、最後に」
最後に残ったティエルノは、小さく微笑んで、
「メンバー、かな。将来、ポケモンのダンスチームを作りたいから。一緒に踊ってると、すごく楽しいんだ！」
「なるほどなるほど……。ああ、今回の図鑑所有者も、楽しい人間ばかりだ！」
そう言うと、プラターヌは高らかに笑った。
「……さて、本題はこれからだ。君たちはこれからどうするつもりだい？　トレーナーだから、やっぱりバトルを極める……そういうのもアリなんじゃないかな？」

「戦ってくれるんですか!?」

イクスは思わず椅子から立ち上がり、言った。

「うーん、そうしてもいいけど僕も忙しいからね。これからとんぼ返りだ。……だから、君たちには色々と教えなくてはならない。この世界にある、『ポケモンジム』ということに」

「ポケモンジムって……八つバッジを集めるとチャンピオンに挑戦できるという、あの?」

「それはポケモンリーグだ。少々惜しいな。……その、バッジを持っているのがポケモンジムのジムリーダーだよ。彼らは、強さを認めた者にバッジを授ける。そして、そのバッジを八つ集めれば……そのとおり、四天王とチャンピオンへと挑む権利が与えられるというわけだ。だから、先ずはポケモンジムへ行ってみるのもどうだろうか? この街にもポケモンジムがあるからね。行くも行かないも君たち自身ではあるが」

プラターヌはイクスに向けて小さく微笑む。

対して、イクスは今からでもポケモンジムへ行きたかった。戦ってみたかった。

プラターヌはその気持ちを汲み取っていたからこそ——そう言ったのだ。それを考えると、イグレックはイクス以外の人間の気持ちを代表するかのように、小さくため息をついた。

第六話　ＶＳアメタマＩ

ハクダンシティジムは街の北東にある。

ちなみに今いるのはイクスのみだ。ほかのみんなはどうしたか？　といえば、トレーナーズスクールで待つとのことである。別に先に行っててもいい――イクスはそう言ったが、サナが「みんなで行かないと旅にならないでしょ！」とのことで、仕方なくその言葉に従うこととなった。

かくして、今彼はハクダンシティジムの前に立っているのだった。

「……何を怯えているんだ、俺は」

イクスは自問自答する。別に、ここに来たくないわけではない。寧ろ来たかったんじゃないか――と。

そんなことを孕みながら……彼はジムの中へと入っていった。

「オース、未来のチャンピオン！」

入って最初に声をかけられたのは、小太りの男だった。

ジムはとても狭く、真ん中に穴が開いていた。

「ここは、ハクダンシティジムですよね？」
　イクスが訊ねると、小太りの男は頷く。
「ああ、そうだとも！　あ、もしかしてそうだと思っていないんだね？　分かるよ～。でもここは確かに！　ハクダンシティジムさ！　間違ってなんていないよ」
「そ、そうですか……」
「ハクダンシティジムは虫タイプのジムだ。……君の手持ちは？」
「ハリマロンとヤヤコマ……かな。一応レベル１０にまではあげているけれど」
「ならば、一応倒せそうじゃないですかね。虫タイプは飛行タイプの技に弱いですからね……まあ、私から言えるのはこの程度です」
「なんだ、至極気になる」
「まあまあ、頑張ってください……」
　そう言って、男は真ん中の穴へと誘導する。穴はよく見れば棒が下へと伸びていた。下に向かえばジムがある――大方そういうことなのだろう。そう考えて、彼はそこへと飛び込んだ。

◇◇◇

ジムトレーナーを倒して、漸く彼はジムの最奥部まで辿りついた。
「おっ、君がパンジーが言ってたオトコノコだね？」
そこに居たのは、カメラを構えていた女性だった。
こくり、とイクスは頷く。それを見て、女性は小さく微笑む。
「いいんじゃない、いいんじゃないの！　勝負に挑むその表情、いいんじゃない、いいんじゃないの！」
「……バトルのルールは」
「そうですね。交換アリで、一匹が倒れたら終わり……これが、カロスリーグのルール！　だったらこれに従うっきゃない！　いいんじゃない、いいんじゃないの！」
それを聞くと、イクスは改めてボールを見る。ハリマロンも、ヤヤコマもやる気満々だと言わんばかりに大きく頷いた。
「おっ、ポケモンもばっちりだね！　いいね、私はシャッターチャンスを狙うように……あっ、シャッターチャンスってのはほんとに一瞬だからね、０コンマ何秒の世界だから！　だからこそ、反射神経を問われるのさ、カメラマンというのは。……えーっとなんだっけ。そうだそうだ。いいね、私はシャッターチャンスを狙うように勝利も狙っちゃうんだからね！　……えーと、あ、私の名前言ってないね。私はビオラって言います。今更過ぎますが。……それじゃ、よろしくお願いします！」

そう言って、ビオラはボールを高く投げた。それを見てイクスもボールを投げる。
そして、同時にボールが地に落ちた。
出てきたポケモンは、イクスがハリマロン、ビオラがアメタマだった。
（アメタマ……ということは、草タイプのハリマロンには有利！　ということは先ずは……）
「ハリマロン！　『やどりぎのたね』！」
そう言うと、ハリマロンは種をアメタマめがけて投げつける。種は見事アメタマの足元へ届き――そこですくすくと育った。
「アメタマ、『みずあそび』！」
次にアメタマは水を吹き出した。直ぐにそれが雨のように降り注ぐ。みずあそびという技は炎の威力を弱める技だ。しかし、今は関係ない。何故ならイクスは炎技を仕えるポケモンが居ないから――だ。
そして、やどりぎが容赦なくアメタマの体力を吸い取っていく。ダメージは一回毎ならば低いが、それが蓄積されればあっというまに体力は尽きる。
「さあ……どうする」
イクスは思わず呟いてしまった。
対して、ビオラは表情を崩さずに、

「私はジムリーダーよ？　そう簡単に諦めるわけがないでしょう？　……アメタマ、『でんこうせっか』!!」

そう言ったのと同時に、アメタマはハリマロンへと駆け出していった。

第七話　VSアメタマⅡ

アメタマがハリマロンに与えたダメージは、そう多くはなかった。
だから、イクスは油断してしまっていた。ポケモンバトルに油断は禁物――そんなことはトレーナー同士の常識であるというのに、だ。
だから、彼は、ハリマロンの異変に気付くのに一瞬時間が遅れてしまっていた。
（……おかしい。どうしてハリマロンの方がダメージ的に多いんだ……？　見た限りでは、アメタマも多少のダメージを受けていたが……）
バトルの経験が浅いからこそのミス――それに気付いたのは、それから直ぐのことだった。
「まさか!?」
そう言って、ハリマロン、次いでビオラの順番で視線を動かす。ビオラはそういうのを待ち構えていたらしく、小さく笑った。
「気が付いたみたいだね、いいんじゃない、いいんじゃないの！　……だけど、若干遅かった気もするし、及第点だけど」
ビオラはまだ笑っていた。そして、その笑っていたビオラにイクスは答える。

「『くっつきだま』か……。確かにそれならば、アメタマのターンごとのダメージがでかかったことも頷けるし、今ハリマロンが傷付いているのも理解出来る……！」
「そうだよ、その通りよ。いいんじゃない、いいんじゃないの！　久しぶりに面白いバトルになってきた！」
　そう言ってビオラはモンスターボールを構えた。
「戻って、アメタマ！」
　その言葉の直後、アメタマはモンスターボールへと吸い込まれていった。
　ビオラはモンスターボールを眺め、呟く。
「妹が気に入った理由も、何だか解る気がするなぁ……。久しぶりに、最高に面白いバトルだよ」
　見れば、ビオラの目には熱い炎が宿ったのが解った。今ので、彼女に火がついたのかもしれない。
「いいんじゃない、いいんじゃないの！　私も本気でぶつかんなくちゃね!!」
　そう言って。
　ビオラはもうひとつのモンスターボールを手にとった。構えて、地面に向けて投げる。そこから出てきたポケモンは――ビビヨンだった。
「ビビヨン、『まとわりつく』!!」

そう言ったビオラの命令を聞いたビビヨンは糸を吐き出し――それをハリマロンに巻き付かせた。
「こんなの、『いとをはく』じゃないですか？　痛くも痒くもないですよ」
「そうだと思っているなら、君はまだまだ勉強不足かな」
イクスの発言にビオラはイタズラっぽく微笑む。
ハリマロンがいつもより傷付いている――それも『くっつきだま』によるものではなく、もっと〝粘っこい〟ものだ――ということに気付いたのは、それからそう時間はかからなかった。
「もしかして……」
イクスは漸く一つの考えに辿り着く。それはとてつもなくどうしようもない考えだった。
「その通り！　『まとわりつく』は、ダメージを与える！　くっつきだまのダメージとまとわりつくのダメージ……ひとつひとつは非常に小さいけれど、これが何ターンも続けば……どうなるか、見えてくるんじゃない？」
そう言った直後、ハリマロンは膝から崩れ落ちた。累積ダメージは、相当なものだったらしい。
「あぁ、心配しなくてもいいよ。別に挑戦者は何体やられても問題ないから、さ！」

自分のポケモンはやられることなどない、とでも言いたいのだろうか、その自信は見てとれる。
だが、一体やられた程度で自尊心が打ち砕かれる――イクスはそんな弱い人間ではなかった。
「行け、ヤヤコマ！」
次いで、イクスはポケモンを繰り出す。
「ヤヤコマかぁ……炎タイプのポケモンはやっぱり入れてくるとは思っていたよ。いいんじゃない、いいんじゃないの！」
ビオラの言葉も、今の彼には届いていない。
今はただ――目の前のポケモンを倒すのみ、とそれだけを考えていた。
「ヤヤコマ、『つつく』！」
ヤヤコマはビビヨン目掛けて駆け出していく。そして、その身体に嘴を突き刺した。
「ビビヨン！　……本気を出してきたみたいだね！」
しかしまだビオラの言葉には余裕が見られた。余裕が見られる以上、まだまだ劣勢である状況には変わりないというわけだ。
彼は作戦を考える。ヤヤコマの体力は満タン、そしてハリマロンの体力は殆ど無い。だとしたら、相性の良いヤヤコマ主導の作戦にすべきか？　しかし、そうもいかない。

ヤヤコマは確かにタイプ相性的には優勢であるが、その優勢の技は『つつく』一つしか覚えていないからだ。

いくら何でもこれは心許ない。

ならば、意地でもレベルの高いハリマロンを中心にするべきか？　しかし、そうだとすれば威力は良くても相性の面で相殺されるかもしれない。だとすれば、その状態――現在は、若干膠着状態となっている――が引き続く可能性すらある。

ならば、ならば、ならば――！　彼の中に様々な考えが流れる。しかしどれも具体的に良いアイデアではなく、彼にも焦りが見えはじめていたのが解る。

「このままではいけない……！」

そう言って、イクスはヤヤコマをボールに戻す。その行動にビオラは違和感を覚えた。

イクスは葛藤していた。

このまま、ヤヤコマに任せれば勝つことは容易だろう。

しかし、彼としてはどうしても――最初にえらんだポケモンで勝ちたかった。勝利を決めたかった。

だが、それで負けてしまっては意味がない。

ハリマロンの体力は限界、対して相手のビビヨンも同じ程度の体力だ。

体力だけ見れば、特に問題はない。
しかし、相性を見ればどうか。
相性だけ見れば、最悪といえよう。
「あー、そんなこと、関係ねえ！」
そう言って、彼はモンスターボールを投げる。
出てきたポケモンは――勿論、ハリマロンにほかならない。
「ハリマロン、『たいあたり』だ！」
イクスがハリマロンに命じた、その時だった。
ハリマロンがビビヨンに向けて駆け出していき――その最中、ハリマロンは光に包まれた。
「……ビビヨン、『かぜおこし』!!」
その命令を聞いて、ビビヨンは羽ばたくが、しかしハリマロンには当たらない。
そして、光がきえたとき――『そのポケモン』は新たな姿を手に入れていた。
ハリマロンよりも尖った耳、まるっとした身体――これは、ハリボーグというポケモンだった。
そして、ハリボーグの身体がそのまま、ビビヨンに命中し、ビビヨンは力を失って倒れた。

「ま、負けた……？」
そして、それは、ビオラの敗北とイクスの勝利を意味していた。

◇◇◇

ビオラからバグバッジをもらって、イクスは外に出た。外ではイクスたちが既に待っていた。
「あれ、博士は？」
「博士は既にミアレシティの研究所に戻ったって。待っているよ！　とか言っていたけれど」
「そっか」
イクスは微笑む。
「まあ、これでバッジも手に入れたし……完璧だ」
そうして、彼らはハクダンシティを出る。
次の街は――ミアレシティ。

第八話　ＶＳカモネギ　◇

【ポケモン交換、できるかな？】

サナはハクダンシティを歩いていた。なぜ彼女一人だけなのかといえば、イクスとイグレックはジム戦に奔走しているし、ティエルノはダンスチームを、トロバはポケモン図鑑を完成させるためのポケモンを集めている。

しかし明確な目的もないサナは、こうカフェでのんびりするしかないのだ。

「どうしようかなあ……」

サナには明確な「これがしたい！」という気持ちがはっきり言って、なかった。

彼女にとってポケモンは友達なのだけれど、『旅の目的』がそれに合致するのかは、正直言い難い。

「ねえ、どう思う？　ホルビー」

そう言ってサナは抱きかかえているホルビーを見る。ホルビーはその言葉にただ首を傾げるだけだった。

「もしもし、そこの君」

「は、ひゃい!?」

サナは急に話しかけられて、思わず声が裏返った。
そこに居たのは、スーツを着た男だった。手元にはモンスターボールがある。
「もしよければでいいんだが……君のホルビーと私のカモネギ、交換することはできないかね？」
交換。
それは、文字通りの意味だ。自分のポケモンを相手に渡す。その代わりとして、相手からもポケモンをもらう――これがポケモン交換だ。
それを行うということは、ホルビーを手放すということでもある。
それを考えると――彼女は一瞬躊躇ってしまった。
でも――サナは考える。
もしかしたら、彼女といるより、その人といたほうがホルビーにとってはいいのかもしれない――そうも思えてきたのだ。
「もし君が嫌ならば、それでもいいんだが……」
サナが長考していたので、男は慌ててそう言った。
だが、サナははっきりとこういった。
「いえ、交換、お願いします！」

◇◇◇

この時代において、交換は未だにシンプルなものである。図鑑所有者同士であるなら、図鑑を用いての交換も可能であるのだが、一般人同士ではそうも行かない。

だから、単純にモンスターボールを交換するだけ。それで『交換』が成立する。

「……はい、これで僕のカモネギは君のものだ。大切にするよ」

そう言って、男は手を振って立ち去っていった。

「これで……いいのかな」

そう言ってサナは交換してもらったモンスターボールを見る。ボールの中からカモネギが悲しそうな表情でサナの方を見ていた。

それを見て、サナは直ぐに笑顔を取り戻す。

「……悲しんでちゃ、ポケモンも悲しんじゃうね。だから、楽しく生きなくちゃ！」

そう。今は、

この新しい出会いに感謝しなくては――サナはそんなことを思いながら、カフェを後にするのだった。

第九話　ＶＳヤヤコマ　◇

【ローラースケートに気をつけて！】

４番道路をぶらぶらと歩くイクス。

目的地はミアレシティ――今はイクス以外にもイグレック、サナ、トロバ、ティエルノがいる。彼らも目的地はミアレシティだ。ミアレシティへ向かうには、彼らが今通っている４番道路――パルテール街道というらしい――を通らざるを得ない。

しかしながら、この道路は長い。直線のようにも見えるが、真ん中にある噴水によく観光客が訪れる（美しい噴水として認定されている）のだが、それがあってか、とても長い。

ただし、ベンチがたくさんとある。

「ちょっとベンチで休まないか？」

イクスの問いに、全員は賛成と言わんばかりに、大きく頷いた。

◇◇◇

「ミアレシティはマダマダ先だね……」
ティエルノが呟くと、彼のすぐ横を何かが通り過ぎた。
それは、ローラースケートに乗った女性だった。
「いいなあ……ああいうのに乗ればあっという間に着くんだろうな……」
イグレックがそんなことをぽつりと呟いた。
「だったら乗ってみる？」
そう言われて、彼らは振り返る。後ろにいたのは、先ほどとは別のローラースケートに乗る女性トレーナーだった。彼らはそれを見て、暫く言葉を失っていた。
それを見て、トレーナーは何かを察したのか、小さく微笑む。
「……ああ、驚かしちゃってごめんね。一先ず、これをあげるから乗ってみるってのはどうだい？」
その言葉を、イクスたちはただ頷くことしかできなかった。

◇◇◇

ローラースケート。
スポーツとしても取り扱われているし、警察官が交通手段として用いることも多い。

トレーナーからもらったローラースケートをそれぞれイクスたちは装備する。
「ば、バランスがとりづらい……！」
「サナ、しっかり。ヤヤコマも心配しているよ」
サナはトロバに言われて、そちらを見るとヤヤコマがじーっとサナの方を見つめていた。
「大丈夫だよ、大丈夫だからね……」
そう言って――彼女は支えにしていたイクスの肩から手を離した。
だが、倒れる様子はない。
「や、やった……！　やった、やったよイクス!!　みんな!!」
サナはぴょんぴょんとジャンプして喜びを体現する。ヤヤコマもサナの周りを飛んで、ローラースケートが成功したことを喜んでいた。
「あ、アハ……。ありがと……ヤヤコマ……！」
そう言って、サナはヤヤコマを抱きしめた。

結局全員がローラースケートに乗ることに成功したのは、それから少ししたときのことだ。

「ありがとうございます！」

そう言って、全員は頭を下げ、ローラースケートで軽快に走っていくのだった。

第十話　ＶＳハリボーグ　◇

【みんな大好き、ポケパルレ！】

４番道路。

今彼らは、ポケモンと触れ合って遊んでいる。

ボール遊びをしたり、ツンツンしたり、ポフレというお菓子を食べさせたり。

イクスたちは皆、それで遊んでいた。とくに女性陣――イグレックとサナが夢中になっている。

どうしてこうしてこういうことをしているのか――、それは少し前に遡る。

遡る程の内容もないのだが、だいすきクラブの女の人がポケパルレについて詳しく教えてくれた。ただそれだけのことである。

「あっ、たくさんポフレもらえたよ！」

サナがぴょんぴょんジャンプして喜びを表現する。

ポフレ――簡単に言えばポケモン用のお菓子である。

難易度の高いミニゲームをクリアすることでたくさんもらうことが出来、更にそれをポケモンに食べさせることで仲良し度が上昇する。

そういえば。

どうやって、ポケモンをポケパルレで遊ばせているのだろうか。

モンスターボールには、ポケモンの夢を読み取る装置が標準装備されている。それを利用して、ポケパルレやスパトレ――ポケモンをトレーニングさせるものだ――にポケモンを送り込むことが出来る。中には、ポケパルレとポケモンの寝姿を同時に見ながら楽しむというトレーナーも現れているほどだ。

「やーん、またミニゲーム失敗しちゃった。どうしてサナはそこまでうまいのかしら?」

イグレックはそう言いながら、ポケパルレを一旦中断した。今彼らは二つのベンチを独占する形になっており、そこでポケパルレを行っていたのだった。

イクスもハリボーグでポケパルレを行っている。今行っているのは、仮想空間にある木の実を、ポケモンが欲しい木の実にして落とすといったもの。これが単純な様にも思えるが、なかなか難しい。

「ふう……四十個か……。これ以上は厳しいかな」

ふと、イクスは空を見上げた。

空を見ると、若干赤くなってきていた。もう夕暮れ時なのだろう。

ともなれば、急いで次の街――ミアレシティへ向かわねばならなかった。

「ねえ、みんな」

イグレックとイクスが、その言葉を言ったのはちょうど同じタイミングのことだった。
「どうしたの、二人とも？」
「そろそろ私たちも次の街に向けて向かうべきだとおもうのよ」
イグレックの言葉に、サナは首を傾げる。
「えーと」
「ミアレシティよ！　あれほどみんなで『行こう』って言ったじゃない！」
「……そうだったね」
初めに言ったのは、ティエルノだった。
「確かにぼくらはそこへ向かわなくてはいけないよ。……プラターヌ博士の研究所できちんとお礼もしたほうがいいだろうし」
「そうですね、確かにそう思います」
ティエルノの言葉に、トロバが続く。
「よーしっ！　それじゃあ、ミアレシティ目指して突き進むこととしますか！」
最後にイクスが言って、全員で「えい、えい、おー！」と右手を空に突き出す。
ミアレシティへと続くゲートは、目の前に迫っている。

第十一話　ＶＳフラベベ

【大都会ミアレシティ！】

４番道路を抜け、イクスたちはミアレシティへと到着した。

ミアレシティ。

カロス地方のほぼ中心に位置する大都市だ。真ん中にはプリズムタワーが建っており、街のどこからでも見ることが出来る。

高級ブティックに三ツ星レストラン、テレビ局に新聞社、ホロキャスターを開発した研究所まである、カロス地方最大の都市といえよう。

そんな街に、彼らはやってきた。

「うおー、すげえ！　タクシーもバンバン走ってるし、ゴーゴートもいる！　おー、あれがプリズムタワーか！」

イクスはミアレシティに着くやいなやまるで子供のように（確かに彼らは子供であるのだが）騒ぎ出した。

ちょうど、そんな時だった。

「イクスさんたちですね？」

「あなたたちをお待ちしておりました」
唐突に声をかけられ、イクスたちは振り返る。そこには、白い服装を着た男女が立っていた。
「はじめまして。わたくし、シーナと言います」
「僕はデクシオ。それぞれ、二年前に図鑑をもらった図鑑所有者だよ。そういう面からすれば君たちの先輩に当たることになる」
二年前。
それを聞いて、イクスたちは思い出す。
二年前――世界は大きく一変した。
世界を揺るがす大きな事件が起きたのだ。
『最終兵器を復活させよ』と謳った新興宗教が、各地で暴動を起こし、ポケモンと人を離別させようとした。
その時の暴動を食い止めたのが――、そこにいるジーナとデクシオなのだ。
「お会い出来て光栄です」
そう言ってイグレックは一歩出る。
そしてイグレックは握手を交わした。
「いやあ……とはいえ今は実際に図鑑所有者としては活動していないけれどね。図鑑も

既に博士に返したから、僕たちはただのトレーナーだよ」
「どうして、返してしまったんですか？」
　イグレックの問に、デクシオは少しだけしょんぼりとした。
「……まあ、いろいろとあってね」
　デクシオの言葉を聞いて、イクスたちはそれ以上追求しないこととした。
「そうだった、イクスさんたち。博士が呼んでいます。どうやら、忘れ物があったらしいの」
　そう切り出したのは、シーナだった。
「ちょうど僕らも博士の研究所に行こうと思っていたんです！　改めてポケモンをいただいたお礼がしたくて……」
　トロバの言葉に、うんうんとシーナは頷く。
「そうだね、だったら急いで……というわけでもないけれど、向かいましょうか。プラターヌ博士のポケモン研究所はここからそう遠くはありません。私たちについてきてください」
　そう言って、シーナとデクシオは歩き出した。イクスたちはただ、それに従うだけだった。

◇◇◇

ミアレシティの南部にある、プラターヌポケモン研究所。
その三階にある、博士の部屋へイクスたちは訪れた。
エレベータで三階まで上がると、ちょうどそれを知っているかのように、プラターヌ博士が待ち構えていた。
「やあ、ここまでご苦労さま！　イクスくんたち！」
プラターヌはそう、涼しい表情で言った。
対して、ジーナとデクシオの表情は厳しい。
「博士、彼らにフシギダネ、ヒトカゲ、ゼニガメを渡しにハクダンまで出向いたというのに、アレを忘れて、しかもここまで来ていただいたんですよ？」
「君たちふたりは相変わらず堅いなあ……。ほら、これだよ、みんな」
そう言って、プラターヌはあるものを取り出した。
それは宝箱だった。
そして、プラターヌはそれを開ける。
するとそこには……光り輝く石があった。
「……これは？」

「これはメガストーンというんだ」
「メガストーン？」
「君たち、ヒトカゲの最終進化系はなんだか解るかい？」
「リザードン、ですか」
　プラターヌの問にいち早く答えたのは、トロバだった。
「そうだ、リザードンだ。そして、そのリザードンには新たな進化の可能性があることを……君たちは知っているかい？」
「新たな進化……？」
　そのキーワードはイクスたちをクギ付けにさせた。
　そして、プラターヌはその言葉を口にした。
「そう……新たな進化『メガシンカ』……。その実態はよく解っていない。そして、このメガシンカの初めて観測された場所……それはここカロス地方。今は全世界で観測されていることもあるらしいけれど……先ずはこのカロス地方からどうして『メガシンカ』というものが始まったのか？　研究を続けている、というわけさ」
　プラターヌはそう言って、本棚から一冊の本を取り出した。
　本を開き、中身を読み始める。
「一説には三千年前に栄えた王国がその鍵を握っているとも聞くんだけれどね。その王

国はカロスを強大な力で統治していたとも、王の荘厳な感じで侵略していたとも言われているが……三千年も昔のことを知る人間は、到底生きてやしないからね。そういうのも解らないんだよ」

プラターヌはそう言って時計を見た。

「……さて、イクスくんたちも、出かけようではないか。ジーナ、デクシオ。すまないけれど、ここに暫く居てもらってもいいかな？　そう時間はかからないと思うから」

「どちらへ？」

「ちょっと、『カフェ・ソレイユ』まで。イクスくんたちもぜひ来た方がいいと思うんだ」

「どうしてですか？」

トロバが訊ねると、プラターヌは彼の手首についている機械――ホロキャスターを指差す。

「ホロキャスターを開発した、フラダリさんって聞いたことはないかな？　これから彼と会う約束があってね……。それじゃ、二人ともよろしく頼むよ」

その言葉を聞いて、ジーナとデクシオはゆっくりと頷き、イクスたちに大きく手を振った。

◇◇◇

カフェ・ソレイユはミアレシティの南に位置する、カロス地方でも有名なカフェである。

その理由は、カフェ・ソレイユにある有名な人間が来ているから――だが、実際にその姿を見ることはそう滅多にない。

プラターヌを先頭にして、イクスたちはカフェ・ソレイユに入る。中はこじんまりとしていて、新聞を読むサラリーマンや、お気に入りのポケモンと一緒にコーヒーをたしなむ女性と、その人となりは様々だ。

「あ、いたいた。彼がフラダリだよ。……あれ？　何か取り込み中のようだね……」

そこに居たのは、まるでカエンジシの鬣の如き髪型をした男――フラダリが居た。

対して彼と口論を交わしているのは、羽のような飾りがついた白い衣装を着た女性だった。しかし、それは誰だって見たことのある人間の姿だった。

「あれって……カルネさんじゃないですか!?　カロス地方一の大女優の!!」

イグレックがそう言って、イクスは漸くどうして彼女たちが驚いているのか理解した。イクスはこのカロス地方に来て日が浅いから、気付かないのにも無理はない。

しかしながら、彼らは衆目を気にもせず、何を口論しているのだろうか？

「カルネさん。あなたは大女優だ。とても若々しいし、美しい。だが、それをしわしわの

おばあちゃんになっても続けることが出来るでしょうか？」
フラダリは非常にのっぺりとした口調で、淡々と告げた。
「フラダリさん。先程からあなたは何を言いたいのでしょう？」
対して、カルネもそれに平坦に、ただし若干低い声で答える。彼女の地位的な意味でもあからさまな怒りは表現出来ないが、しかし怒っているというのは大体の人が感じられるくらいには彼女は不機嫌だった。
「美しい世界、正しい世界……。そうなれば、永遠の美をも手に入れることが出来るとは思いませんか」
「愚問ね、そんなものを手に入れて、何になるというのかしら？　私にも解るように……そうだ。そこに居る若いトレーナーさんたちにも解るように言ってくれるといいのだけれど」
そう言われてフラダリは振り返る。そしてそこにいたプラターヌを見て、彼は一歩出た。
「おお、プラターヌ。私が用事で呼んだのに、実はこれから私の方に仕事が入っていてね……すまない」
そう言って、フラダリはカフェを出ていった。
フラダリの背後を眺めて、プラターヌは呟く。

「出鼻を挫かれてしまったよ」
肩を竦めたプラターヌを横目に、カルネがイクスの目の前に立っていた。
さすがにイクスも何が何だか解らないので、思い切って彼女に訊ねる。
「あの……何か？」
「いや……。あなたはポケモンをもらったばっかりなのよね」
カルネの言葉に、イクスは頷く。
「実は私もポケモンを育てているのよ。……もし、今度会えたら戦ってみたいわね」
最後にじゃあねとウインクをイクスたちに送って、カルネもカフェを後にした。
「それじゃあ、改めてこれからのことを話そうか。みんな、ちょっとそこのテーブルに座ってくれるかい？」
プラターヌに誘われ、イクスたちは腰掛ける。
椅子に座ると、プラターヌが話をはじめる。
「さて……先程見せたとおり、メガストーンという、まだこの地方に眠るたくさんの『知らないこと』がある。メガストーンにメガシンカがその例えだ。……君たちは未来あるトレーナーだ。だから、君たちの目で、それを見て欲しい。知らないことを、世界を見て欲しい。僕はそう思って、君たちにポケモン図鑑を渡した……」
「それじゃあ、これからもポケモン図鑑とポケモンは……」

トロバの気持ちを汲んだのか、プラターヌは頷く。
「ああ。ずっと、君たちのものだよ。僕に奪う権利なんてもうないさ」
その言葉に全員が喜んだのは――言うまでもない。

第十二話　ＶＳヘイガニ

【ダンス！　ダンス！　ティエルノ！】

五番道路。

ミアレシティから伸びる五本の道路のうちの一つだ。ミアレシティが旅のゴールだと（勝手に）思っていたイクスたちはプラターヌの言葉に従って、一先ず『メガシンカ』について調べることとした。

メガシンカ。

カロス地方を発祥として伝わるポケモン進化のもう一つの可能性。

その方法等は明らかになっておらず、カロス地方ではシャラシティのマスタータワーに住む数少ない人間のみがなることが出来るという。

その手がかりを探すためにも、彼らはシャラシティを目指すことにした――。

が、今はイクスしか居ない。

イグレックたちとは暫くのお別れ。何故ならば、始まりはプラターヌの一言からだった。

「そういえば君たちはずっと五人でここまで来たんだよね……。どうだろう？　ここは

五人に別れてポケモン図鑑を最終的に完成させるというのは」
その言葉に彼らは少なからず動揺した。今まで五人でここまで来たのだ。自分一人だけになっても何とかなるだろうか――と。
しかし、彼らのそんな不安はある意志によって覆されてしまった。
モンスターボールの中に入っていたポケモンがモンスターボールを叩いたのだ。慌ててイクスたちは見てみると――彼らの目には、光があった。強い意志があった。火が灯っていた。
まるで、『もっと旅がしたい！』と言うように。
それを見てイクスたちはそれぞれの顔を見比べ――最後にゆっくり頷いた。

◇◇◇

そして、今。
イクスはティエルノに呼び出され、五番道路に来ていた。
五番道路の花畑。
そこが彼らの待ち合わせ場所だった。
「ティエルノ、ここに呼び出していったいどうしたんだ？」

イクスの言葉にティエルノは小さく頷く。
「……バトルがしたいんだ。このモヤモヤを……解き放ってほしいからね」
「モヤモヤ？」
「博士に別れてポケモン図鑑を完成させるように言われたでしょ？」
イクスは頷く。
「それが、どうも僕には踏ん切りがつかなくてさ。だからいっそポケモンバトルでこてんぱんにやってもらおうかな、と」
「いや、その思考は間違っていないが」
イクス――いや、世のトレーナーは皆知り合いに「こてんぱんにしてくれ」等と言われてはいそうですかと言える人はそういないだろう。
勿論イクスもその例には漏れず、ティエルノにそう言われたとしても躊躇ってしまうばかりだった。
だが、直ぐにそれは掻き消されることとなる。
ティエルノの目がぶれることなく、ただ真っ直ぐとイクスの目を見ていたことだ。
「……解った」
イクスはそう言うと、モンスターボールを投げた。
ティエルノもそれを見て大きく頷くと――イクスと同じく、モンスターボールを投げ

た。
そして同時に地面に着いて、モンスターボールからそれぞれポケモンが出てきた。
イクスはハリボーグ。
ティエルノはヘイガニだ。
「ヘイガニか……ティエルノの幼馴染なんだっけ？」
「そうだよ、僕の小さい頃からの友達さ！　ヘイガニたちとダンスチームを組む！　それが僕の夢！」
そう言って、ティエルノはヘイガニに向かって、
「ヘイガニ、『バブルこうせん』！」
叫んだ。
対して、イクスは、
「ハリボーグ、『つるのムチ』！」
命令すると、ハリボーグからムチが撓った。そしてそれはヘイガニへと容赦なく命中する。
「ヘイガニ！」
ヘイガニはそれをまともにくらってしまい、倒れた。
「お疲れ様、ヘイガニ」

そしてヘイガニをモンスターボールへと戻し、戦いはあっという間に決した。
「あ～あ……負けちゃった……」
そう言ってティエルノはへなへなと崩れ落ちた。
だが、その表情は笑っていた。
「やっぱりイクスは強いなあ……。ジムリーダーを倒しただけのことはあるよ」
「ジムリーダーとはいっても、カロス地方のうちの一人だけだぞ」
そう言うとティエルノは失笑する。
「そうだね」
さてと、とティエルノは起き上がると、空を見上げた。
ちょうどその時だった。拍手が彼らに向けて捧げられていたのは。
そちらを振り向くと、そこにいたのはひとりの少女だった。金髪のトリプルテールにヘルメット、ローラースケートにスパッツとかなりスポーティーな格好だった。
「君は……？」
「私はコルニ！　ローラースケートが好きでついついこの辺まできちゃうんだよね～」
彼女の隣には二匹のルカリオがいた。
そして、そのうちの一匹がイクスにぴったりとくっついた。
「どうしたの、ルカリオ？」

コルニが訊ねるも、ルカリオは何も反応しなかった。
「うーん……ルカリオは波導を読み取るというし、それで君の波導を読み取ったのかな？」
そうコルニは自己解決すると、イクスが歩いてきた方向へと走っていった。彼女が手を振ったので、イクスとティエルノも手を振ることとした。
「僕は、僕なりに旅をすることにするよ」
コルニが居なくなって、ティエルノはそう言った。
それに、イクスはただ頷くだけだった。
そして、コルニがローラースケートでやってきた方向へ歩いて行った。
残されたのはイクスだけだった。
帽子の位置を細かく決め、ティエルノを追うように歩き出した。
次の目的地はコボクタウン。そこまで、あと少しだ。

第十三話　ＶＳカビゴンＩ

【食いしん坊のアイツ！】

コボクタウン。

カロス地方の西側に位置する小さな田舎町だ。観光資源といえるのが、町の北側にあるショボンヌ城だろう。ショボンヌ城は三千年前、このカロス地方にあった王国のものだとされている。中はこじんまりとしたもので、しかし三千年前のものが良く残っていることから、隠れた観光スポットになっている。

そんな場所にイクスはやって来た、のだが――。

「メガシンカ……ふむ。あまり聞いたことはないな。申し訳ない。わざわざここまで来ていただいたのに……」

コボクタウンの町長の家で、メガシンカに関する情報が聞けるかと思っていたが、そんなことは何とも骨折り損だった。

「どうするかなぁ……」

そんなことを言いながら、イクスはメインストリートを歩いていた。とはいえこの町

はとても小さな町だ。城下町の名残で町は高い塀に囲まれている。少し前にこの町の塀を残すか否か会議があったようだったが、結局彼らは時代よりも景観を優先した。結果としてこの町はカロス地方でも有名な町となっているのだ。

ショボンヌ城へイクスは向かった。理由は特に無いが、急ぐ用事も彼にはなかったからだ。

ショボンヌ城はひどく閑散としていた。確かにこの城は知る人ぞ知る観光スポットではあるのだが、だからといってまったく知名度が無いわけではなかった。

「……あっ、イクっち」

「イクっちってなんだよ、それ」

城に入ると、サナがイクスを待ち構えていたかのように此方を見ていた。

「イクっちもメガシンカを調べに来たんだよね?」

「まぁ、ここが一番近いし、城みたいに古い建物もある。もしかしたら……だなんて思ったんだが、そんなことはなかったな」

イクスはそう言うと、サナも小さく微笑んだ。

「……もし、よろしければこの城の案内をさせてはいただけないでしょうか?」

そう声を聞いて、そちらを向くと、そこには若い男が立っていた。トレーナーの袖には黄色の腕章がしてある。

「あぁ、私はこのショボンヌ城の案内役を務めております。どうです？　この城と、カロスにあった王国について、少しばかりお話が出来ればと思うのですが……」
男が言うと、サナは大きく頷く。男は「それでは」とだけ言って、話を始めた。

◇◇◇

三千年前。
カロス地方は深い深い森に包まれていた。ポケモンがありとあらゆる場所に居を構え、争いはあったもののほどほどに。……要するに、何もない平和な世界だった。
ポケモンとの共存のため、細々と暮らしてきた人間は、一つの場所に集まって、共に生きようと決意した。
それが、私たち人間です。
私たち人間は集まり、王国を作りました。その名前はあまりにも古いためか、記録にはまったく残っていないのが残念なところですが……領土はちょうど今のカロス地方より少し広いくらいだったそうです。
そうして王国は生まれ、とても栄えました。他の国との交流も順調に進み、人々は豊かな生活を送っていたと聞きます。

……ですが、あるとき起きてしまったのです。
それが起きた理由は詳しく解明されていませんが……しかし、ひどく些細なことだったのです。
些細なことだったが、それによって世界を揺るがすあの出来事が起きたのですから……世界は本当に理解出来ません。
……何があった、って？　解りました、お教えしましょう。ただし、非常に簡単なことです。

戦争、ですよ。

戦争が起きて、凡てを破壊し――燃やし尽くしたのです。
原因は単なることだったとされています。そうして、ポケモンを愛する王はそれを止めようとしました。
しかし出来なかったのです。
もう人々は……そんなたったひとりの声で止まらないくらいに熱気に包まれていたのです。
王の傍らにはいつも一匹のポケモンがいました。

そのポケモンと王はとても仲良く……まるで友達のようだったと言われています。
そのポケモンも、戦争に駆り出されました。

戦争が終わりました。
多くのポケモンが、人が、死にました。
カロス地方は大きく悲しみに包まれました。

戦争が終わって、ポケモンが死んで。
一番悲しんだのは、王でした。
王はポケモンの亡骸を抱えて――ただただ泣いていました。

◇◇◇

「……悲しいお話ね」
男の話を聞いて、サナはそう言った。少しだけ声が変な感じだったのは、彼女も感極

まって泣いていたからかもしれない。
　それを聞いて男は頷く。
「ええ、ええ。そうです。……ですが残念ながらこの続きは私たちにはわかりません」
「えっ？」
「何分昔の話でして。残っている資料も少ないのです」
　そう言って男は肩を竦めた。
　――その時だった。
「おい！　また七番道路にあいつが現れたぞ!!」
　それを聞いて、男は舌打ちする。
　その言葉を言ったのは先程七番道路の方に立っていた男だった。彼はどうやらコボクタウンの守衛のような役割をしているようだった。
「あ、アイツって？」
　イクスが訊ねる。
「アイツとは……いや、今ここで説明するよりも実際に見てもあったほうがいいでしょう。一先ず、一緒に来てください」
　その言葉に従って、イクスとサナはその男のあとを追った。

第十四話　ＶＳトリミアン

パルファム宮殿はコボクタウンの北西に位置する大きな宮殿である。

三百年ほど前の王が、その権力を鼓舞し、自慢するために造らせた城であり、そのつくりは一言で言えば『豪華絢爛』という言葉が似合う作りになっていた。また、その豪華絢爛な建物と、あまりにも広すぎる庭を見に来るために訪れる観光客も少なくない。

イクスとサナも、そのパルファム宮殿へとやってきていた。

「……にしても困るよね。入るのに千円も取られるなんて！　しかも一人！」

サナは怒っていた。

それもそのはず。このパルファム宮殿に入るには保全費だか管理費だかで一人千円取られるのである。それを知らなかったイクスとサナはまんまとそのお金を徴収されてしまったのだ。

「まあ、入れたんだから良しとしようよ」

この千円はあとでどうにかしなくちゃな。イクスはそう思うと、宮殿の中へ足を踏み入れた。

◇◇◇

絢爛豪華な建物は、見るものを圧倒させる。
それがパルファム宮殿の特徴でもあった。現にイクスとサナが入るとそこにはたくさんの人がその光景に見惚れていたし、写真を撮る人間も多く言いた。
因みにパルファム宮殿では内部でのポケモンの連れ歩き及びポケモンバトルは禁止となっているため、安心して中を見ることが出来る……というわけだ。
「おろろーんおろろーん……わたしのかわいいトリミアンは、いったいどこへきえてしまったのか……」
「トリミアン？」
そこにふと、ひとりの男性が通りかかった。
そして、彼が言った言葉を、イクスは聞き逃さなかった。
「そうなんだ。わたしのトレビア～ンなトリミアンが、いなくなってしまったんだ……！　それはたぶん散歩のときに矧ぐれてしまったのかも解らない。なにせあの庭は広大だからね！　ちなみにもう庭は探索したかい？」
「いや、まだ」
イクスが答えると、男は口を窄める。

「そうか。そいつは残念」
男は頷く。
「……それより！　早く私のトリミアンちゃんを助けてはくれないかい!?　頼むよ！」
強くそう言われてしまっては、イクスも否定の意志を示すことは出来なかった。

「どうして、あの場で断ることができなかったのよ？　イクっち」
サナの言葉を聞いてイクスはげんなりしてしまった。サナの言い分も最もだ。なんで彼は直ぐに了承してしまったのだろうか。ここで彼の言い分を聞いてみることにしよう。
「だってさ、考えてもみてくれ。俺たちは何をしに来た？　ポケモンの笛を借りに来たんだろ。だったら恩は早めに、ね」
「恩？　どういうこと？」
「サナは気づかなかった？　あの人……きっとここのオーナーだよ」
それを聞いてサナは声に出してしまうところだったが既のところで止める。
そして、気持ちをある程度整えたところで改めてイクスに訊ねる。
「……なんで解ったの？」

「あまりにも小奇麗だったからね。それで」
「それだけ？」
「いいや、もっとあるよ。例えばサナはこんな豪勢な調度品がたくさんある部屋でポケモンを放って、目を離しておくかい？」
「……普通なら、しないよね」
「つまりそういうことだよ」
　イクスは首肯し、
「普通ならしない。けど、ある人間はそれを簡単にしてしまう。そんな抵抗なんて考えることもせずに、ね。それはいったい誰だと思う？」
「……この屋敷の主、しか考えつかないよね。イクっちの仮説通りだったら」
　その言葉にイクスは頷いた。

◇◇◇

　とはいえ。
　あの主と思われる人間の言うことを忠実に聞くとなると、広大な庭を捜索範囲に加えなくてはならないことになる。

正直なところ、それは彼らにとって辛かった。しかしそれはやらなくてはいけないし、それをしなくては話が進まない。

だから彼らは早くトリミアンが見つかることを祈って探すほかなかった。

「あっ！　いたー！」

だから、あっという間にサナがトリミアンの姿を見つけたときは、イクスはほっと溜息を吐いたのだ。それは安堵から来たものだ。

サナはトリミアンを抱き締めていた。そしてトリミアンは逃げる様子も見せることなく、サナの身体で眠っていた。

「……なんだか、あっという間だったな」

呟いて、イクスは腰をぽんぽんと叩いた。

◇◇◇

「私のトレビアンなトリミアンを見つけてくれて本当にありがとう！　……忘れていたけど、私はここの主だよ！　素晴らしかっただろう、あの庭は？　いつも私のトレビアンなトリミアンちゃんはあそこを歩いているからこそ、このトレビアンなスタイルを維持しているのかもしれないね！」

主の長い長い言葉に、イクスとサナは若干圧倒されながらも頷いていた。
「君たちののぞみをひとつだけ叶えてあげよう。トレビアンなトリミアンを見つけてくれた褒美だよ！　なんでもいい、言ってみなさい！」
「それじゃ……『ポケモンの笛』を貸していただけないでしょうか」
それを聞いて主は目を細める。
イクスは言葉を続ける。
「実はこのパルファム宮殿の南でカビゴンが眠ってしまっていて、通ることができなくなってしまっているんです。そこが通れなくては困る人も多くて……そして僕たちはここにやってきて、ポケモンの笛を貸していただこうかと……」
「……そうだったのか、それは知らなかった。すまなかったな、迷惑をかけてしまっていたようだ。君たちにポケモンの笛を授けよう。少し待っていなさい」
そう言って主は奥の部屋へ消えていった。
少しして、主は何かを持って帰ってきた。
それは笛だった。モンスターボールがあしらわれたデザインで、少し奇抜だった。
「……これがポケモンの笛だよ。それでやってくれ。それを吹けばどんなポケモンでも目を覚ますはずだ」
そしてイクスはそれを受け取った。

第十五話　ＶＳカビゴンⅡ

コボクタウンの西側の道路。

気持ちよさそうに眠っているカビゴンの前に、イクスたちはやってきた。

ただし今度は、さきほどまでとは違う。きちんとした対処法を持って――のことだ。

「……ポケモンの笛、まさか私たちもこうすんなりお借りできるとは思ってもいなかった」

コボクタウンに住む男（さきほど城の説明をしていた男である）はそう言うと、ポケモンの笛を銜えた。

「……いいですか？　もしかしたら寝起きのカビゴンがこちらに襲ってくるかもしれません。その時は、お願いします」

「「解りました」」

サナとイクスは頷く。

それを聞いて男は頷くと、笛を吹いた。その音色はとても暖かい音色だった。

そして、その音色が聞こえて――カビゴンは目を覚ました。人間には暖かい音色に聞こえるがポケモンには別の音色で聞こえるらしい。

そしてカビゴンは、男の言った通りイクスとサナの方に向かって駆け出してきた。その迫力は圧倒的なものであった。見るものを圧倒させる巨漢ともいえるカビゴンは、圧倒とともに人々を恐怖へと導く。

だが。

それでもイクスが動揺することなどなかった。

「ハリボーグ、『とっしん』!!」

その言葉にハリボーグは頷くと、カビゴン向かって走り出した。

そして。

ハリボーグは向かってくるカビゴンを受け止めた。

「なんと。あのカビゴンを受け止めるとは……」

そしてそれにはカビゴンも予想外のことだったらしく、目を丸くしていた。

「そしてその至近距離から『ニードルアーム』だ!!」

ニードルアームが、カビゴンに襲いかかる。

そして、カビゴンはゆっくりと倒れていった。

◇◇◇

「す、すごい……」
　イクスがカビゴンをモンスターボールにいれて、『捕獲』を完了する。
　踵を返して、イクスは言った。
「僕たちはこれからコウジンタウンの方へ向かおうと思っています」
「……ありがとうございます。君たちにはなんとお礼を申し上げればいいか」
「いや、大丈夫です。こっちだってカビゴンがいたから通ることができなかったし、それにカビゴンを仲間にすることが出来たのは、ある意味幸運とも言えると思うんです」
　そう言って、イクスは踵を返し、歩き始めた。
　手を振る人たちが見えなくなるのを見計らって、一緒に歩いていたサナは言った。
「……イクっちってあんなにきな臭い発言をする人だったっけ？」
「僕はいつだってこうだよ？　それがどうかした？」
「あ。だめだ。これ天然で言ったパターンだわ」
　サナの言葉をイクスは理解することができず、ただ首を傾げるだけだった。

◇◇◇

　その頃、イグレックはその先にある施設へと足を踏み入れていた。

バトルシャトー。
ポケモントレーナーの強さを爵位で測る場所である。イグレックは初めて入ったのでバロネスの称号を与えられている。正直な話し、先に進むためには障害になっているに等しい。
でもどうして彼女がここにいるのか？
それはイグレックと偶然再会したトロバとのバトルをするためだった。
「トロバとバトルするのはどれくらいぶりだったっけ？　久しぶりな気がするよ」
「僕もですよ、イグレック！」
お互い、ポケモンもトレーナーも疲弊していた。
イグレックはヤヤコマ。
対するトロバはホルビーだ。
お互い、あと一発が最後。
「ヤヤコマ、『かまいたち』!!」
「ホルビー、『マッドショット』!!」
そして。
お互いの攻撃が、同時に命中した。
ホルビーとヤヤコマもまた、同時に倒れた。

「ダブル……ノックアウト?」
「この勝負、引き分けっ!!」
ちょうど審判を担当してもらっていた執事が、そう言って手を掲げた。

「うわー、負けちゃった。それにしてもトロバ強いのね」
「いや、イグレックこそ強かったですよ。僕が勝てたのは偶然だと思います」
そう言ってお互いを称賛する。
ポケモンの回復はすぐにシャトーにあるポケモンセンターで行われるため安心だ。
「それじゃ、行きましょうか!」
「はい!」
お気を付けて、と言った声を背中で受け取ったイグレックとトロバは同時にバトルシャトーを後にした。
ちょうどその時だった。
「あ～イグレック!」
「うそ、イクス!?」
イグレックとサナ、イクスとトロバは同時にお互いを見た。
イグレックとトロバが出た、ちょうどそのタイミングで彼らと出会ったのだ。

「僕たち今からコウジンタウンの方に向かおうと思うんだけど」
「コウジンタウン？　どうしてまた」
「なんでも、ポケモンの化石があるんだって」
地図を広げながらイクスは言った。
化石は男の子にとって憧れともいえる。そして化石から蘇るポケモンというのはとても珍しく、そして強い。それもあってイクスはそれを狙おうとしているのだろう。
「そういえば、ティエルノは？」
「ティエルノだったら『自転車レースのある町があるんだって！』とか言ってそっちのほうに言っちゃったけど……」
それを聞いてイクスは頷く。
「そっか。もしあえたら五人旅を再開できるかな、なんて思ったんだけど、そう甘くもいかないね」
イグレックはそれを聞いて笑みを浮かべる。
そして、ティエルノを除いた四人は、一路ポケモンの化石で有名なコウジンタウンへと向かうことにした。

第十六話　ＶＳズバット

「プラターヌ博士、私はこれからホウエンへと向かってみようと考えています」
ところ変わって、プラターヌ博士の研究所にて二人の男が会話をしていた。
ひとりはホロキャスターを開発したフラダリ。
そしてもうひとりはポケモン研究の権威、プラターヌだ。
「……どうして唐突にそんなことを言いだしたのです、フラダリ氏」
「ホウエン地方というのは遠い場所であることは私も知っております。ですが、ホウエン地方で新たなメガシンカが発見されたと聞くではないですか。私とて学究の徒。すぐにその場に向かい、確認したいのです」
「なるほど。……それは高尚な理由です。私もカロスのことが忙しくなければすぐにそちらへ出向きたいものですが……」
「ならばこうしましょう。私が映像を録画してきます。それを、逐一ホロキャスターを通してお見せするというのは」
「さすがフラダリ氏！」
プラターヌは二人分のコーヒーを持ってきてテーブルへ置いた。

「おや、いつもの二人はいらっしゃらないのですか？」
　フラダリの言葉にプラターヌは肩を竦める。
「ジーナとデクシオですか。彼らは今、イクスくんたちにパーツを渡しに行きましたよ。漸く新しいカロス図鑑のバージョンアップが出来ましたからね。本当ならば私が直接会いに行って説明したいところですが、そうも言っていられません。まだまだ世界は知らないものに満ち溢れています。だからこそ、調べなくてはならないのです」
「成る程。流石はプラターヌ博士。関心いたします」
　フラダリは首肯。
　プラターヌは腰掛け、再びフラダリに訊ねる。
「それで、出発はいつごろを？」
「なるべく早く出向きたいと考えております。予定では明後日でしょうか」
「明後日……ですか。大変なことになるとは思いますが、お気を付けて」
「ええ。ありがとうございます」
　そしてフラダリとプラターヌの会話は終了し、彼らは別れた。

◇◇◇

ところ変わって、ここはコウジンタウン……ではなく、地繋ぎの洞穴を抜けた道路である。そこは高台になっていて、そこから景色を望むことができる。
「あそこに見えるのがショウヨウシティか。そしてそこに居るのはジムリーダー……」
「ああ、くそっ。あそこまで見えているのに行けることが出来ないなんて。ここから崖を降りようなんて……まあ出来ないよな」
「そりゃそうだよ、イクス。危険だ」
そうイクスに注意したのはティエルノだった。
「そんなことよりあの洞窟ズバットだらけだったわよね？　それを避けていたらスカートが汚れちゃったわ……！」
「ま、まあ……洞窟にズバットが住んでいるのは半ば常識みたいなことだし……」
そう話をするのは女性陣だ。
さて、ひとり会話から残されたトロバは小さく溜息を吐いて、前を見る。そこに立っていたのは、彼らもよく知る人間だった。
「あ……あなたたちは」
「お待ちしておりました、図鑑所有者たち」
そこに立っていたのはジーナとデクシオだった。
デクシオはあるものを持っていた。それは小さなケースだった。

「いったい、どうしたのですか?」
訊ねたのはイグレックだった。
その言葉にジーナは答える。
「プラターヌ博士が新しいアップデートをしたい、と言っていたの。だけれど、あなたたちは旅を続けているでしょう? とはいえわざわざ研究所まで戻ってもらうのも忍びない。だから、私たちに頼まれたの。アップデートパッチを、持っていくように」
「ここにやってくるのを待っていた、ということですか?」
ジーナはそれに首肯する。
「そしてあなたたちにこのパッチ……が入ったチップを渡します。そしてそれを図鑑に入れることで自動的にパッチが適用され、バージョンアップが終了する……プラターヌ博士はそう言っていました」
「つまり、」
トロバは訊ねる。
「それをすれば今まで見たことのなかったポケモンが、きちんと記録されるようになるということですか?」
「ええ。そうだと思います」

そしてイクスたちの図鑑にアップデートパッチが入ったチップが入れられる。入れた瞬間図鑑は起動し、『パッチを適用しています』という無機質な文字が画面上に浮かび上がるのを見た。それを見て図鑑が正常に反応していることを知った。

パッチの適用はものの五分で終わってしまった。

「それでは、私たちはこれで。良い旅を」

それだけを済ませて、ジーナとデクシオはイクスたちが出てきた地繋ぎの洞穴へと入っていった。

イクスたちは図鑑を見る。そこにはこう書かれていた。

――コーストカロス図鑑、と。

第十七話　ＶＳサイホーン

「コーストカロス図鑑……」
イクスたちは新しく見る図鑑に目を輝かせていた。当然かもしれない。今までずっと持っていた図鑑とは違う、見たことのないポケモンがたくさん登場することを意味する図鑑になったということだ。
その図鑑を見て、イクスが一言。
「まだまだこの地方には、見たことのないポケモンがいっぱいいるってことだよな……」
その言葉にほかの人間も賛同するように頷く。
ジーナとデクシオとは既に分かれ、コウジンタウンへ向かうため再び彼らは歩いていた。
そして。
「あ、あれは……」
目の前に見えるのは、大きな白い建物。
「コウジンタウンに到着したんだー！」
それがコウジンタウンの博物館であることだと、彼らが知ったのはそれから少し後の

ことだった。

◇◇◇

コウジンタウンポケモンセンター。

「はあー、やっと着いたね」

「……そうだね」

イグレックの言葉にイクスは答える。しかしイクスの言葉はどこか重たい。疲れているのが原因だろう。

「とりあえずここから化石があるという洞窟へ向かうには……どうしたらいいんだろう」

サナが言った。それは彼らにとって共通の疑問であった。

これから化石の洞窟へはどう向かえばいいのか。

彼らにとって、一番の議題になっているのは『メガシンカ』についてだ。メガシンカは石が必要だと言われており、そのため、化石の採れる洞窟ならば何かあるのではないか――そう期待していたのだ。

「まあ……とりあえず、あればいいですけれど。無かったら完全に骨折り損の草臥れ儲

けってやつですよ」
「骨折り損の……なんだって？」
「草臥れ儲け、です」
「トロバは相変わらず難しい言葉を使うのが大好きなのよねえ。ほんと」
サナは皮肉混じりに呟く。
イクスはその状況をどうにかしようと小さく咳払いした。
「……とにかく、先ずは洞窟へ向かおう。話はそれからだ」

◇◇◇

9番道路、トゲトゲ山道。
そこは普通の人間が歩くことを許されない、デコボコした道である。
「どうやって通ればいいのかしら……」
「あ、見て！　あそこにサイホーンがいるわ！」
サナの言葉のあとに、イグレックは言った。
そこに居たのはサイホーンの群れだった。
そしてその群れを先導するトレジャーハンターの姿があった。

「あの……すいません！　そのサイホーンに乗せていただけないですかー！」
　イグレックは叫びながらトレジャーハンターへ近づく。
「構わないよ、そもそもこの山道はサイホーンに乗っていくことが出来るスポットとして有名になっているからね。若干観光地めいたものにもなっているし」
「へえ……はじめて知りました」
　イグレックの言葉にトレジャーハンターは首を傾げる。
「そうかい。ここはそれなりに有名なのだけれどね。子供たちだけで旅をしているのを見るのも、僕にとっては充分珍しいことではあるけれど」
「ポケモン図鑑を埋める旅をしているんです」
　そう言ってイグレックはポケモン図鑑をトレジャーハンターに見せた。
　それを見てトレジャーハンターは目を丸くする。
「ほう！　ポケモン図鑑を埋める旅をしているのか。このカロス地方は広大だからね。時にはポケモンの力を借りなくてはならない時だって出てくるだろう。そうして僕たちは育ってきたと言ってもいい。その気持ちを忘れてはならない、と僕も常日頃考えているからね」
　そう言いながらトレジャーハンターはイクスたちをサイホーンに乗せてくれた。
「サイホーンの操縦の仕方は？」

「だいたいですが、知っています。母がサイホーンレーサーなので」
答えたのはイグレックだ。それを聞いてトレジャーハンターは頷く。
「ならば、大丈夫そうだね。それでは、良い旅を!」
そう言ってトレジャーハンターは手を振った。
イクスたちもそれに答えて、手を振りその場を離れた。
「さて! サイホーンに乗ることも出来たことだし、急いで洞窟へ向かいましょう!」
「オーッ!」
イクスたちは大きく腕を突き出した。
目指す場所、輝きの洞窟まではあと少しである。

トレジャーハンターはイクスたちが見えなくなるまで手を振った。見えなくなったあと、またサイホーンを乗りたいと思う人を待つために定位置へついた。
「すいません、サイホーンに乗りたいのですが」
声が聞こえた。
「解った。それじゃ好きなサイホーンに乗ってくれ」
異質な男だった。スーツもネクタイもサングラスも凡て赤で決めたファッションの男だった。髪も何だかよく解らない髪型をしており、至極目立つ男だった。

それでも、彼はそれを不審と思うことなく、男にサイホーンを渡した。
そして、男はサイホーンに乗り込み、イクスたちの後を追うように輝きの洞窟へと向かった。

第十八話　ＶＳサーナイト

輝きの洞窟。

「ここが輝きの洞窟か……」

イクスたちは輝きの洞窟へ到着した。

理由は単純明快。メガストーンがあるかもしれない――そう思ったからだ。

「メガストーンがあるかもしれないから……ここにやってきたはいいものの、ほんとうにあるのかなあ」

「ストーン、っていうくらいですからきっとあるでしょう。ほら、『石』ですし」

イグレックの言葉に答えたのはトロバ。

「そういう意味で言ったんじゃないけれど……。そもそも採掘されているなら、もっとメガストーンって有名になっていると思わない？」

確かにイグレックの言うとおりだった。

この輝きの洞窟は化石がよく採掘されることで有名な洞窟である。過去にも様々な化石が採掘され話題になっている。

しかしながらメガストーンが採掘された、という報告はない。

だからこそ、イクスたちは気になっていたのだ。
このような場所に、ほんとうに――メガストーンはあるのだろうか、ということに。
「き、きっとありますよ、メガストーンは……」
トロバが落ち込むイクスたちの気分を鼓舞させようとするが、彼らの空気は重い。
「でも、ほんとうにメガストーンはあるのかしら……。ただの化石しか見えないけれど」
そもそも。
輝きの洞窟は、石に付着しているコケがエメラルド色に輝くことにより、方向感覚がずれてしまうから、別名『迷いの洞窟』とも言われている。
石が採掘されることを有名にしているわけではない。
「……ねえ、取り敢えずここから出ない？　もう、見た感じどこにもないし……」
そうイグレックが言う前に――イクスがある一点を指さした。
そこにあったのは――居たのは、赤いスーツの男だった。
「……誰だろう？」
そう言って、男も反応して、踵を返す。
その男は、正面から見ても、不思議なファッションだった。スーツもネクタイもサングラスも凡て赤で決めたファッションの男だった。髪も何だかよく解らない髪型をしており、至極目立つ男だった。

「まさか、このようなところにお子様が来るとはね？　ここは立ち入り禁止だったはずだが……」
「そのようなことは出ていませんでしたよ？」
　答えたのはトロバだった。
「……そんなことは関係ない。私たちにとって、ここは大事な場所なのですよ。メガストーンを手に入れるためには。しかしここにはメガストーンが無かったらしいですが」
「やっぱり、無かったの」
　イグレックは溜息を吐いて、踵を返そうとする。
　しかし――彼女たちの背後にいた赤スーツの男を見て、硬直する。
「立ち入り禁止にしていたはずなのに、すいません。私が失敗したようで」
「お前のせいか……。まあ、いい。丁重に去ってもらうだけだよ」
　そして、ポケモンバトルの幕が開く――。

「……そこまでよ」
　赤スーツの男の背後には、さらに女性が立っていた。
　パーカーを着た女性だったが、お淑やかな雰囲気が醸し出ていた。パーカーを着てい

るはずだったのに、そうではない、ドレスのような恰好を着ているようにも見える――。
そしてその姿は、イクスたちが見たことのある女性だった。
「カルネ……さん？」
カルネの隣に立っていたのは、サーナイト。
「怪しい雰囲気のスーツ男を見つけて追いかけてみたら……、やっぱり怪しかった。どうするつもり？　いたいけな少年少女を」
「カルネ……。確かボスが最重要人物としてマークしていた……」
「あら、そうなの？　光栄ね。でも、そうだとしても……この状況は許せないなあ」
そして彼女は首にかけたペンダントを手に取る。
同時に、サーナイトが持っている七色に輝く石が、眩い光を放つ――。
「本当はあんまり見せたくないのだけれど、この状況を看過するわけにもいかないし」
サーナイトの姿が――ゆっくりと変化を遂げる。
「見て居なさい、トレーナーさんたち。これが――メガシンカよ」
そこにあったサーナイトは、今までのサーナイトの姿ではない――別の姿となっていた。

第十九話　ＶＳイベルタルＩ

メガシンカ。
それはポケモンに秘められた新たな可能性。
噂には聞いていたが――いざ目の前でそれを見ると、生命の神秘というものを感じるものである。
「これが……メガシンカ……」
トロバは興奮のあまり、身体を震わせていた。
「ははは！　まさかこのような場所であなたのような人間が繰り出すメガシンカを目の当たりにすることが出来るとは！　今日はいい日だねえ！」
赤スーツの男は笑っていた。
「そんなことを言える余裕でも、あるのかしら？」
カルネは溜息を吐く。
このバトルを退屈と言わんばかりに。
「……何を溜息吐いているというのだ！　そんなことをして、いいと思っているのか!?」
赤スーツの男は地団駄を踏む。

カルネは当然の如く、呟いた。
「だって、つまらないものはつまらない。そういうしかないでしょう？　……とはいえ、このバトルを簡単に決着着けるのも、難しいわけだし」
「だったら溜息を吐いている暇はあるのかな？　行け、カエンジシ！」
轟！　と炎が矢の如く撃ち放たれる。
その攻撃にイクスたちは、カルネが逃げられない――と思っていた。なぜなら、その攻撃はポケモンでは無く、カルネを狙っていたのだから。
だが、カルネは一切動じることなど無かった。
「カルネさん！」
イクスは思わず叫ぶ。
だが、それでもカルネは動じない。

――そして、彼女はゆっくりと呟いた。

「サーナイト、『サイコキネシス』」
たったそれだけだった。
その一言だけで、サーナイトは念の力を撃ち放った。

それが炎の矢に激突し、一瞬で霧散する。
いや、それどころか。
サイコキネシスはそのままカエンジシへ一直線に向かう。
「か、カエンジシ……避けろ！　避けるんだ！」
「遅いよ」
一言。
カルネが放ったと同時に――カエンジシにサイコキネシスが命中する。
そしてカエンジシはその場に倒れ込む。戦闘不能だ。
「く……。まさかこんなところでやられるとは……！　ここは退散……だ？」
そこで、漸く気付いた。
洞窟全体を揺るがす振動と、地面に皹が入っていることに。
「どういうこと……！」
「バトルの影響で、脆い床が崩れてしまう！　みんな、急いで安全なところへ――」
そう言いかけた、その時だった。
刹那、床が崩れ落ち――イクスたちはそのまま落下していった。

◇◇◇

イクスが目を覚ますと、そこは別の空間だった。見上げると、少し高い位置にぽっかりと穴が開いている。とてもじゃないが、そこまで上ることは難しい。
「……イグレック、サナ、ティエルノ、トロバ、無事か？」
イクスのすぐそばにイグレックたちも倒れ込んでいた。
イクスの言葉を聞いて、四人はゆっくりと立ち上がる。
「ううん……イクス、大丈夫？」
イグレックの言葉に彼は頷く。
「それにしても……ここはいったいどこなんだ？」
イクスの言葉に、イグレックたちも首を傾げる。
「ここは……きっと何かが封印されていた場所ね」
声を聴き、そちらを向く。
そこに居たのはカルネとサーナイトだった。どうやらもうメガシンカの姿ではなくなっているようだった。
「封印、ですか？」
カルネの言葉を反芻するイクス。
「ええ、この空間は……きっと、あるポケモンを封印している場所だと思う。私の推測が

正しければ――」
「おおう！　これは……これは！」
遠くで、あの赤スーツの男の声が聞こえた。
「不味い。もう見つけてしまったのか！」
そう言って、カルネは走り出す。
それを追うように、イクスたちも走り出した。
その先に何があるのか――まだ彼らは知らない。

◇◇◇

そこにあったのは、大きな繭だった。
赤スーツの男は、イクスたちがやってきたのを見て笑みを浮かべる。
「これだよ、我々が真に求めていたのは！　カロス地方の伝説のポケモン、その名は『イベルタル』！　このポケモンこそ、フレア団の求めるポケモン！」
「あなたたち……このポケモンを使って、何をするつもりなの」
カルネは言った。
対して、赤スーツの男は頷く。

「残念ながらあまり知らない。強いて言うなら、『我々だけが生き残る』ために、イベルタルの力を利用するとでも言えばいいか」
「自分たちが生き残る為だけに、ポケモンの力を利用する、と？　ふざけるな！　このカロスはみんなのためにあるものだ！」
　イクスは思わず自分の意見を叫んだ。
　だが、その意見は赤スーツの男に聞き届けられない。
「……そんなきれいごと、子供のうちに捨て去ったよ。ボスも言っていた。もうこの世界は手詰まりだと、選ばれた人間のみが明日への切符を手に入れる。必ずしも全員が明日への切符を平等に手に入れる時代ではなくなったのだ……と！」

第二十話　ＶＳイベルタルⅡ

「ふざけている、そんなこと。絶対に許せない……！　カロスの人の思いを踏みにじるつもり!?」
「カロスの思い？　はて、何のことかな。考えてみろ。すでに我々は科学力を手に入れている。カロスの力も掌握しているといっても過言ではない」
　破壊の繭を見つめながら、赤スーツの男は微笑んだ。
「素晴らしい……。これが、カロスの伝説ポケモンだというのか。今は休眠中だと聞くが、それも都合がいい。我々のアジトにもっていくには」
「それをみすみす見逃すと思っているの?」
　そういったのはカルネだった。
　カルネの問いにうなずく赤スーツの男。
「それくらい解っている。解っているとも。だからこそ、我々は……これをするだけで良かった」
　ずらり、と気づけばカルネたちの周りには赤スーツの男の集団が居た。
「……まさか！　この場所を、」

「教えていました。最初から、ね？　それくらいしておくのは当然のことでしょう？　別に、私たちは『目的』さえ達成できればいいのですから――」

そう言って、赤スーツの男は、破壊の繭を指さした。

「さあ！　クセロシキ様に献上するために、あの破壊の繭を持ち帰るぞ!!」

「そんなこと――」

「させない、と？　さすがはカロスチャンピオンのあなた、それにしても報告を聞いたときは驚いたわ。まさかほんとうにこんなところに居るなんて……」

その声を聴いて一番驚いたのは今まで上に立っていた赤スーツの男だった。

「ま、まさか……コレア様!?　なぜ、コレア様が!」

紫色の髪をした、赤い服装の女性が立っていた。

コレア、と呼ばれた女性は言った。

「だから言ったじゃない。これから大急ぎで計画を進めないといけない。もう時間は限られているのだから。……行くわよ」

「待ちなさい、あなた……フレア団は、いったい、何を目的としているの!?」

「だから、その男が言ったじゃない」

面倒くさそうな表情をして、コレアは言った。

「この世界の人間を減らし、争いの種となるポケモンを消し去ること。これが私たちの

目的。さ、行きましょう」
「待ちなさい、まだ話は――！」
「ハハハ、じゃあねー」
そして、コレア以下フレア団は光に包まれた。
『フラッシュ』か！」
目を瞑る。フラッシュをされてしまえば、そう簡単に動くことは出来ない。
そして、光のおさまった段階で目を開けると――そこには誰も居なかった。
「誰も……いない？　逃げられた？」
「ねえ、イクス、見て！」
そう言ったのはサナだった。サナが指さした方向、そこには破壊の繭があった――はずだった。
しかし、
「は、破壊の繭が……！」
もう、そこには破壊の繭などなかった。
正確に言えば、破壊の繭があったと思われる形跡、それだけが残されている状態になっていた。

▪　◇◇◇

「ボスはまだ戻らないんだゾ」
「まだホウエンに？」
「ホウエンでメガシンカが誕生した。その歴史を紐解くために向かった……そう言っていたんだゾ」
「まったく……仕方ないことね。とにかく、私たちは私たちで計画を進めていきましょう。ところで、ＸとＹについては？」
「Ｙについては確保。現在このアジトに向けて運送中なんだゾ。Ｘも現在エスプリが捜索中。……まあ、時間の問題なんだゾ」
「そうならいいけれど。とにかく、早急に進めましょう。それが我々フレア団の望みであり、ボスの望みなのですから」
「解っているんだゾ」
　そして、二人の会話は終了した。

第二十一話　ＶＳイベルタルⅢ

対策を練らねばならなかった。
問題はこれからのことだった。
「破壊の繭はカロスに伝わる伝説のポケモンだった……。しかし、それを使って何をしようとしているのか、はっきり言って解らないことではあるけれど」
カルネは頷きながら、イクスたちのほうを見た。
「……それにしても、あなたたち、よくフレア団相手に怖気づくことなく戦ってくれた。それについて私は、感謝をしなければならない。ありがとう」
「カルネさん……、あなたは」
イクスの問いを最後まで聞くことは無く、カルネは頷いた。
イクスが何を思っているのか、カルネにはもう解っていた――ということだろう。
「そう。確かにあなたが思っている通り、私はカロス地方のチャンピオン。ほんとうならば、率先してフレア団の悪事に気付かなければならなかったのだろうけれど……。残念だった、もう少し早く気付いていれば……このようなことにはならなかったというのに」

「カルネさん……」
「それはきっと、間違いだと思うぞ」
「誰――？」
　それを聞いた彼女の声は、どこか儚げなものだった。
「まさか『アイツ』からああいう言葉を聞いたときは驚いたものだが、ほんとうにこのようなことになるとは思いもしなかった。知っているか？　かつて、イッシュ地方では、ポケモンと話すことの出来る人間が居たことを。その純粋すぎる思いを、たくさんの人が踏み躙ったことを。そして彼は世界を知るために、旅をした。……まさか、数年後にまた出会うことになるとは思いもしなかったけれどね」
　そこに立っていたのは、一人の青年だった。
　黒を基調としたファッションをしていた青年は、一匹のポケモンを連れ歩きしていた。
　そのポケモンは炎タイプのポケモンなのか――鼻から息を抜くと、火が噴き出てきた。
「……まさか、あなたは……」
　カルネの言葉に、彼は頷いた。
「俺の名前はブラック。遠いイッシュ地方のチャンピオンで……今はしがない旅人だ

よ。君たちを、世界の危機を救うために、ここにやってきた」

▪　◇◇◇

　イクスたちは輝きの洞窟を抜け、一度コウジンタウンへと戻ってきた。
「なんというか、とても疲れたね……」
　サナはテーブルにへたり込んで、そう言った。
　当然だろう。あれほどのバトルを経験し、地面に落下。さらにいろいろとついていけない様々な事実を聞いてしまったからだ。疲れていないほうが、間違っているかもしれない。
「それにしても、まさかあなたが来てくれるとは思いもしなかったわ、ブラックさん」
　カルネの言葉を聞いて、頷く。
「チャンピオンたる者、ほかの地方の危機を聞いたら駆けつけないわけにもいかないだろう?」
「けれど、どうしてそれを?　……ほかの地方にもこの地方の危機が知れ渡っているというの」
「いいや、違うよ。ただ、さっきも言ったかもしれないが、古い知り合いにポケモンの声

を聴くことが出来るヤツが居てね……そいつから教えてもらった」
「ポケモンの声を聴く？　いいなあ、私も仲間のポケモンの声を聴きたいなあ……」
イグレックの言葉を聞いて、ブラックは俯く。
「……それが、ほんとうにいいことばかりであるかは、言わないほうがいいだろう」
「？」
ブラックが言った言葉を、彼らは聞き取ることは出来なかった。
唯一、事情を知っていると思われるカルネだけがブラックと同じように俯いた表情を見せた。
「……問題は山積みだ。いかにして、フレア団の野望を食い止めるか。アジトに向かうしか、無いだろう」
「アジト……！　まさか、ブラックさん、あなた、その場所を……！」
ブラックは頷く。
それを聞いてカルネは笑みを浮かべて、何度もうなずいた。
「そうよ、それよ。まだ時間はあるはず。まだ時間は残っているはず！　それならば、何とかまだ間に合うはず……！」
「だが、一つ問題が残っている。それは――」
ブラックはイクスたちを指さして、こう言った。

「君たちと、フレア団での戦力差だ。現状の戦力差でフレア団に勝てるとは到底思えない。すなわち、レベルアップが必要だ……そして俺は、そのためにカロスにやってきた」

第二十二話　ＶＳマフォクシー＆ブリガロン

「Z？」

捕らわれの身となった大男に話をするクセロシキ。

「そう。その名前はZ……。この地方を監視する役目を持つ。かつてはこの地方では無い、別の地方に居た。今は地方という概念で名づけられているかもしれないが、私の頃は一つの王国に過ぎなかった」

「『ポケジニア』……。モンスターボールも開発されていない太古の昔に存在したといわれる、ポケモンと人間のユートピア」

クセロシキの言葉に頷く大男。

「しかし、それも今や過去の話。今や世界は地方という概念で括られている存在となっている。ポケモン協会という、害悪のせいでな」

クセロシキの背後から、声が聞こえた。

クセロシキが振り返ると、そこに立っていたのは見覚えのある人物だった。

いや、忘れるはずが無かった。

「……フラダリ様。戻ってくるのはもっと後だと聞いていたゾ」

「予定が早まった。もっと言えば、ホウエンで色々とゴタゴタがあったものでね、巻き込まれる前に帰ってきた。だが、情報は手に入った」
そう言ってフラダリは一枚のフロッピーを差し出す。
受け取るクセロシキは、首を傾げてフラダリに訊ねる。
「……これは？」
「『世界の区分を一つにする』プログラム、Ａｚｏｔｈ計画のデータ……とでも言えばいいか？」
「世界の区分を……一つに？」
「貴様、まさか最終兵器を使うつもりか……。それも、私欲のために」
大男は鉄格子を握り、フラダリを睨みつける。
しかしながらそれに臆することなく、フラダリは鉄格子に近づく。
「貴様がそれを言える立場か？　ＡＺ。……いや、ポケジニアの王」
フラダリの言葉を聞いて、ＡＺは溜息を吐く。
「脅迫は聞かんぞ、フラダリ。あきらめろ、お前の求める道はその先に残っていない。最終兵器を使って得られるものは無い。世界は破壊され、ポケモンは死滅し、その先に残っているのは絶望のみだ」
「それはただの戯言だ」

ＡＺの忠告をフラダリは一笑に付し、そのまま立ち去って行った。
「忠告はしたぞ、フラダリ。この先に何が待ち受けていようとも……お前はそれを受け入れるというのか」
「私はただ、私が追い求める『美しい世界』を探すだけだよ」
言って、フラダリは部屋を後にした。

■　◇◇◇

修行は続いていた。
ブラックの下でイクスたちが修行を行う形となっているが、自主性を孕んだものとなっていた。ポケモンバトルをして、お互いの技を見つめあう。そしてそれについて対策を練る。それが彼の考えた修行だった。
「……ほんとうにこれだけで強くなるのでしょうか？」
そう言ったのはカルネだった。
カルネの問いに首を傾げるブラック。
「カルネさん、それはいったいどういう意味ですか？」
「だから、こんなことは誰だって出来ることです。わざわざイッシュからあなたが来る

程のものでも……」
「果たして、ほんとうにそうかな？」
「？」
「……この修行は簡単に出来るけれど、それによる結果は一目瞭然だ。そりゃあそうだ。ずっと実戦を続けていくのだから、レベルも上がる」
「けれど……、もっと効率がいいものは？　このまま手を拱いている場合じゃないのは、あなただって十分に解っているはずでしょう?!　だから先ずは……ひゃん?!」
　会話の途中でカルネが変な声を上げた理由はただ一つ。
　ブラックがリュックに入っていた『おいしい水』をカルネの頬に当てたためだ。
「冷えているぞ。こういう時はクールダウンすることも大事だ」
「……ありがとう」
　カルネは溜息を吐いて、おいしい水を一口。
「ハリボーグ、『はっぱカッター』！」
「テールナー、『ほのおのうず』！」
　カルネが水を飲んだ同じタイミングで、イクスとイグレックのバトルが終了したようだった。
　同時に、テールナーとハリボーグの身体がまばゆい光に包まれる。

「これは……」
「これって……！」
イクスとイグレックがその現象が何であるかを直ぐに予測して、顔を綻ばせる。
そして、光が収束すると――、ハリボーグはブリガロン、テールナーはマフォクシーに進化を遂げた。

第二十三話　最終兵器起動（前編）

「ハリ……ボーグ？」
「テールナー……？」
「いや、違うな」
イグレックとイクスの言葉を否定したのは、ほかならないブラックだった。
ブラックの言葉を聞いて首を傾げるイクスたち。
「それはつまり……進化した、ということですか」
「そういうことだ。君たちは充分強くなっている、ということだよ」
「強くなって……いる」
イクスとイグレックはそれぞれお互いの顔を見合わせた。
それを見てブラックは笑みを浮かべた。
「さて……、それじゃ向かうことにするかな」
「どこへ？」
「決まっているだろう？　フレア団が『最終兵器』を使う場所……、それは、」
「それは……？」

「列石があることで有名な場所……セキタイタウン」

▪　◇◇◇

セキタイタウン。

列石があることで有名だが、実際のところはそれ以外何も知られていないとても長閑な村だ。実際、なぜそこまで長閑かというと、その列石自体は珍しいが、歴史的価値がそこまで高いものだとは学者も考えていないため、観光地としてはあまり宜しくないポイントだと考えているようだった。

長閑と知られているその村だったが、今日は様子がおかしいようだった。

「……人の気配が、無い？」

「フレア団め、とうとう本性を出したか」

そう言って舌打ちするブラック。

ブラックの言葉に、イクスは首を傾げた。

「本性を出した……とは？」

「言葉通りの意味だ。フレア団は本性を出していなかった。今までただの慈善団体という認識が強かった。しかしながら、今回の事件で化けの皮をはがしたようだな。……最

終兵器を使われてしまうと、不味いことになる。急がないと」
「ちょっと待ってください。最終兵器って、いったい――」
「それはな、あれだよ。この世界を滅ぼすというな、装置らしいんだよ」
声が聞こえた。
そこに立っていたのは、タンクトップに青いジャンパーを羽織った何とも変わった風貌の男だった。
「ウルップさん」
カルネがウルップの声を聴いて、そう言った。
「久しぶりだな、あの、チャンピオンさんよ」
「そんな畏まらずともいいですのに。……ところで、フレア団は?」
「取り敢えず地上に居る連中はのしちまったよ。四幹部、とやらもだ。それで別にいいんだろ?」
そう言ってウルップは後方を指さす。
すると四人の女性が手足を縛られて拘束されていた。あの様子からすると、ポケモンも没収されているらしい。
そしてそれを取り囲むように立っているのは、カロスのジムリーダーたちだった。
「……あとはお前たちだ。地上の連中……たぶんきっと残党は残っているだろうよ。確

か、クセロシキというやつだ。あいつは曲者だと、ほかの幹部が言っていた。俺たちはそいつを探すことにする。だから、そうだ、お前たちはアジトへ入れ。そして、最終兵器を止めろ」

「ウルップさん……ありがとうございます」

頭を下げるカルネを見て、ウルップは頭を掻いた。

「よせよ、カロス地方のためだ。あんたが頭を下げる話じゃない。それに……お礼を言うならば、戦いが終わった後でも問題ないだろ？」

その言葉にコクリと頷くカルネ。

そしてカルネ率いるイクスたちは、セキタイタウンの北側にあるフレア団アジトへと向かうのだった。

第二十四話　最終兵器起動（中編）

フレア団アジトは静かだった。
「……おかしい。あまりにも静か過ぎる。どうして、ここまで静かなんだ……？」
ブラックは周囲を見渡しながら、首を傾げる。
「そんなことをしている場合じゃないですよ、ブラックさん。ほら、あそこ！」
カルネの言葉に、ブラックはそちらを見る。
そこにあったのは、何らかの装置。
そしてそこにあるモニターを見つめているのは――。
「フラダリ……！」
「おやおや、まさかあなたたちと再会出来るとはね。しかし、もうおしまいだ。最終兵器の起動スイッチは既に手に入れている。あとは起動するのみだ。エネルギー充填も完了しているしね」
「……フラダリ。ほんとうに、あなたがフレア団のボスだとはね……」
カルネは目を細めて、フラダリに問いかける。
「まあ、それは普通に考えられる結論では無かったかな？」

言ったのはブラックだった。
まるでこれから何が起きるのか――知っているようなそぶりだった。
「貴様、何者だ……？　少なくとも、カロスの人間ではないな？」
「世界の危機に、カロスもどこも関係ないだろ？」
ブラックはフラダリの言葉にそう言って、鼻で笑った。
それを聞いたフラダリは一瞬虚を突かれたような感じだったが、直ぐに平静を取り戻して笑みを浮かべる。
「それもそうかもしれないな。でも、私は諦めない。もう最終兵器の起動はこのスイッチを押せば発動する。そうすれば何が始まるか、簡単に教えてやるとしよう」
「最終兵器は、人間の世界、ポケモンの世界、すべてを破壊するものだ」
気付けば、イクスとサナ、トロバ、ティエルノの背後には一人の男が立っていた。
「ＡＺ……、貴様どうやって脱出した！」
「そんなことは、お前の中では些細な問題だろう？　鍵を入手した今、私を必要とはしていないはずだ。いずれにせよ、お前の中では、このカロスを滅ぼすことでどんな意味があるのか知ったことではないし、言える立場ではないが」
「ならば分かっているはずだろう、カロスの王よ。この世界は要らない世界だ。人間とポケモンの、あるべき姿に変えなければならない。そして、この世界を滅ぼすためには

……古代文明の最終兵器を使えば良い。ただそれだけの話だ」
「お前……。カロスに住んでいる人間の気持ちを考えちゃいないのか！」
イクスの言葉に、フラダリは一笑に付す。
「人間の気持ち？　もちろん、考えたことがあるとも。寧ろ考えているといってもいい。考えた結果、人間は下らない考えのもと、ポケモンを使役しているということを判断した。そういうことは、人間の欲望、感情、すべてを吐き出すためにはリセットするしかない。そういう結論に至るまで、そう時間はかからなかった。情報を収集するために、ホロキャスターを利用したことも原因の一つにあるかもしれないがね」

最終話　最終兵器起動（後編）

「フラダリ様、時間となりました」
　やってきたのは、眼鏡の女性――パキラだった。
「おお、パキラ。もう準備が出来たか」
「パキラ……、あなたはどうして！」
「フラダリ様の思想に共感を得た。ただそれだけの話ですよ」
　パキラはカルネから目線を落とす。
　フラダリは笑みを浮かべたまま、最終兵器のスイッチを見つめた。
「長い、時間だった。この最終兵器を撃ち出せば、すべてが終わる。私の念願が……」
「お前たち、何を考えているのか分かっているのか。私が、いったいどうなったのか、知らないわけでもないだろう！」
　ＡＺの言葉を聞いて、ゆっくりと頷いた。
「あれは失敗ではないだろう。寧ろ成功といってもいい。副作用、だったか？　それによって永遠の命を手に入れたと言われているが、まさかほんとうに不老不死の力を手に入れているとは。……だが、だからどうした？」

「何だと……？」
「力の充填は完了している。鍵も差し込んでいる。あとはこの装置のスイッチを押すだけ。非常にシンプルで、簡単な結論ではないかね？　……素晴らしい世界を作るために、私は世界を滅ぼす。至極シンプルな話だ」
「それもまた、エゴじゃないのか！」
「エゴ？　いいや、違う。これは世界の意思だよ」
　フラダリはスイッチを弄びながら、話を始めた。
「しかしながら、結局のところ……それはエゴと言われても仕方ないのかもしれないがね。ただ、私は世界の意思だと考えている。それを受け入れるのは、この世界に住む存在としては当然の責務」
「何を言っているんだ！　この世界は、この世界は……！」
　この世界は汚れた世界。
　だが、そうだろうか？　イクスはずっと暮らしてきたこの世界を、この広い世界を見てきて――この世界が汚れているとは到底考えられなかった。
　だから、この世界をリセットするといったフラダリの思想が理解できなかった。
　だから、イクスはフラダリをじっと見つめることしか出来なかった。
「……ふん。所詮子供には分からない、ということだ。致し方あるまい」

「フラダリ様、もう時間が御座いません。いつでも兵器を発動出来ます」
パキラの言葉を聞いて、フラダリは深く頷いた。
「うむ。それでは時間だ。終焉の時だ。このカロスに破壊と再生を……」
そして、フラダリは最終兵器の起動スイッチを押した。
刹那、フレア団アジト全体が揺れ始めていく。
「最終兵器を……起動したな！」
ＡＺの言葉に、フラダリはただ笑みを湛えるだけだった。

◇◇◇

セキタイタウンの中心部から、何かが地上にせり上がってくる。
それは何か生き物の頭のように見えたが、完全にせり上がった状態でゆっくりと頭が四つに開き、それはまるで花のようだった。
禍々しさすら放っている、巨大な花。
「まさか、あれが最終兵器ってわけじゃあ……」
「あれだよ。何というか、アジトに入っていったあいつらを信じる。そして俺たちは、フレア団を倒す。ただ、それだけだよ」

コルニ、ウルップの会話は花を見つめながら切り上げられた。

そして花の中心にエネルギーが充填され――最終兵器はそのエネルギーを撃ち放った。